

**2012-2013**

**日本語・日本文化  
研修留学生  
論文集**

**秋田大学**



**2012-2013**

**日本語・日本文化  
研修留学生  
論文集**

**秋田大学**



# 目次

## 課題研究 IA/IIA クラス

### ポルトガル人の日本研究者の機会

イネス・マルケス

リスボン大学（ポルトガル・アルマダ市）

### スペイン語・日本語の通訳者になるために どのような条件が必要か

カルロス・ロドリゲス

サンティアゴ大学（チリ・サンティアゴ市）

### 担当者からのコメント

#### —私という人間から始まる研究論文—

牲川 波都季

セガワ ハヅキ，秋田大学国際交流センター（日本・富山県）

## 課題研究 IB/IIB クラス

### 韓国語と日本語の受身の表現の 相違点について

任 芽蘭

イム アラン，国立ハンバット大学校（韓国・大田広域市）

### 日本人の「内」と「外」意識

張 子洋

チョウ ショウ，黒竜江大学（中国・黒竜江省）

### 担当者からのコメント

#### —日研究生論文集に寄せて—

宮本 律子

ミヤモト リツコ，秋田大学教育文化学部（日本・長野県）



# ポルトガル人の 日本研究者の機会

イネス・マルケス

目次

目次	1
1. 問題意識	2
2. ポルトガルと日本の関係	3
2. 1 ポルトガルと日本の共通の歴史（昔から）	3
2. 2 ポルトガルと日本の貿易と文化的関係（最近）	4
2. 3 リスボン大学のアジア研究のシチュエーションについて	6
2. 4 ポルトガルの中で、アジアと日本研究者のための機会がどこ にありますか。	6
3. ポルトガル人の調査	7
3. 1 調査の目的	
3. 2 アジア研究者の証言	7
3. 3 アジア研究専門学生の証言	8
3. 4 アジア研究専門の卒業生の証言	9
3. 5 日本に住んでいるポルトガル人	10
4. 結論	11
4. 1 歴史の研究の重要性	11
4. 2 日本研究者の機会	12
4. 3 将来の研究者の生活	12
4. 4 自分のこれからの予定	13
5. 文献リスト	14



## ポルトガル人の日本研究者の機会

## 1. 問題意識

子供の時から、私は日本に興味があります。四、五歳から、アニメを見始めました。そのアニメは「ドラゴンボール」や「セーラームーン」や「セイントセイヤ」などでした。数年後、日本人の有名な作家の本も読み始めました。その作家は村上春樹と川端康成でした。そして、ほかの作家のフィクション本を読みました。たとえば、「Memoirs of a Geisha」という本です。

その作家の作風はとても違い、その物語は私にとってほかの世界を感じさせました。この新しい世界は私に全然似ていないと思いました。キャラクターが逆境にあっても、静かと平然たるなイメージを伝えました。私の日常の社会の中で、性格の葛藤がいっぱいあるし、アジアの世界の意見は、私にとって、すばらしくて、爽やかです。例えば、村上春樹の物語はいつも超現実主義的な要素があります。その要素は西洋の作家の中でとても珍しいです。川端康成の物語は村上のより現実的なですが、非常にひねりがあります。このひねりの細部は全くもって他の作品と違いました。例えば、川端の「死顔の出来事」という短編物語で、内容は通過儀礼の一部ですが、少し変わった要素が加えられているため、とても印象に残しました。読んだ後の気持ちは不快に感じられるが、西洋では普通ではない事柄だったので、面白く感じられました。その結果、日本の文化と言葉に興味が出てきました。

私は西洋の意見だけになれましたから、その物語とテレビ番組は別のライフスタイルと可能な経験の目を見張る物でした。だから、こんなに異なるところと面白い点を調べてみたかったです。そこで、こんな日本の超現実的な視点を西洋の唯物論の社会に伝えたかったです。西洋と比較すると、日本が哲学的視点から生活を見ることがより自然に感謝しているという超現実的な視点を持っているのです。

私は日本とアジアのことについてももっともっと勉強したかったのですが、家族はあまり支持しませんでした。だから、大学に入る時、もっとコンベンショナルな専門に入学しなければいけません。しかし、本来私はアジアに興味を持っていたので、すぐ生物学の勉強にシフトすることができませんでした。そこで、新しい専門に入学したかったです。始めは、家族は私の生物学専門からアジア研究専門への変更の決定を奨励しませんでした。でも、だんだん、アジア研究の可能性に気付きました。

私の国で、今仕事の機会がありません。世界は財政危機にあるし、ポルトガルの国債は多いし、失業は上昇しています。だから、たくさんポルトガル人は外国に仕事の機会を探します。そのために、もっと外国語を勉強し、国際奨学金を試そう

としています。私の専門はアジア研究ですから、たぶん平均的なポルトガル人よりもっと機会があります。でも、ポルトガルでアジアはまだ知られていないです。従って、自分たちにはなにができるでしょうか。

私は、将来、日本の研究者になりたいです。もっとポルトガルと日本の文化や歴史における関係について知りたいです。でも、今、この夢は少しファンタジーみたいです。

最近、外国語としてのポルトガル語を教えることが考えています。今、翻訳と通訳のほか、それはアジア研究の新しい学生の一番ありそうな経歴と思います。

## 2. ポルトガルと日本の関係

現在、二年間半ぐらいアジアのことを勉強しています。始めに、アジアの言語だけ勉強したかったのですが、思いもよらないところで東アジアの歴史に興味が出てきました。特に、大航海時代のポルトガルと東アジアの国の関係についてもっと知りたいです。私が考えることには、その古い歴史をもとに今の両国の関係は良くすることができます。ポルトガルと日本の関係の重要性を見せるために、共通の歴史と最近の関係を纏めたいと思います。

### 2. 1. ポルトガルと日本の共通の歴史（昔から）<sup>1</sup>

1543年ごろに、初めてのポルトガル人は種子島に着きました。そして、黒船で長崎で南蛮貿易が始まりました。「黒船」はその時日本人が呼んでいた貿易船の名前です。その後、フランシスコ・ザビエルが来ました。イエズス会司祭でしたから、1549年に日本でキリスト教の福音伝道のプロセスを始めました。そこで、色々な宣教師も日本に来ました。宣教師のいる所はポルトガル人の業者もいるから、その所の経済はよくになりました。だから、いくつかの大名は宣教師を歓迎しました。

1565年に、ルイス・フロイス司祭は福音伝道のリーダーになりました。ルイズ・フロイスはとても大切なポルトガルと日本の関係の歴史の人です。彼はヨーロッパまで

<sup>1</sup> この点を使うために、次の本と記事をよみました：

- Tavares, 2004.
- Da Silva, 2010.
- Varley, 2000.
- Oliveira e Costa, 1999.
- Loureiro, 1990.
- Oliveira e Costa, 1993.

日本の文化と社会についての報告を送りました。しかも、織田信長と親密な関係がありました。その時、「日本の歴史」と「ヨーロッパ文化と日本文化」という本を書きました。その本はとても特別な歴史の文書です。

このほかの大切なポルトガル人の宣教師は João Rodrigues (ジョアン・ロドリゲス) という司祭です。彼の日本語習得がとても早かったので、「通訳者ツズ」として知られていました。そのおかげで、何度も豊臣秀吉の個人的な通訳者として働いたそうです。

福音伝道のために、宣教師は宗教絵画をもたらしました。加えて、漆の物をたくさん作りました。たくさん日本人がキリスト教に興味を持ちました。すぐに、キリスト教は人気が出てきました。その時の美術が「南蛮美術」です。今、この物はとても高く貴重です。たとえば、南蛮屏風はとても有名です。その屏風には日本に南蛮人の到着の実例があります。南蛮屏風の主な色は黒と金色です。

日本に来るポルトガル人は宣教師だけではありませんでした。業者が日本の南の港に色々なヨーロッパの物を持って着ていました。たとえばメガネとたばこです。その中で、一番重要な物は鉄砲です。その時に鉄砲は人気に出たので、日本の歴史に凄まじい影響を与えました。

この時代には、日本に一人も統治者がいませんでした。たくさんのお大名は領土を制御しました。後で、1560年ごろから、織田信長は国の領土を統一しました。織田信長の後、豊臣秀吉と徳川家康が統一を完成しました。

この時に、宣教師は医学のことも知っていました。全国で病院と「Misericórdias」(慈悲の家)を設立しました。だから、キリスト教は、国民にとって、もっとも大切なことになりました。だから、豊臣秀吉は怖くなりました。よく対策を講じましたが、ぜんぶだめになりました。1600年、関ヶ原の戦いを開始しました。豊臣秀吉は敗北させられました。1603年に、徳川幕府は始まっていきました。

1637年に、島原の乱を開始しました。この反乱はキリスト教徒を整理しました。それから、キリスト教は日本で廃止されました、そしてすべてのヨーロッパの人が日本を去りました。にもかかわらず、その時の結果は今も感じることができます。たとえば、日本語で、たくさんポルトガル語の単語があります：「パン」や「たばこ」や「キリスト」などです。それに、ポルトガルの料理も日本で採択されました。

## 2. 2. ポルトガルと日本の貿易と文化的関係 (最近)

じゅうろくせいき いま ぼるとがる にほん かんけい ほぞん  
 十六世紀から今までポルトガルと日本の関係はだいたい保存されています。  
 いちばんさいきん ことし さんがつ ぼるとがる がいむだいじん ほうにち ほうもん  
 一番最近では今年の三月ポルトガルの外務大臣Paulo Portas の訪日です。その訪問一つ  
 取ると東京外国語大学のポルトガル語の授業をもっと支援をしてあげるといふ内容を  
 結びました。その上、両国はグリーンエネルギーの分野でパートナーシップを結びま  
 した。<sup>2</sup>

政治について話を続けると、強い政治の結末は一般的な価値観（たとえば、平和  
 はんえい びんしゆしゆぎ じゆう ふきゆう  
 や繁栄や民主主義の自由など）の普及につながっていました。なぜなら、日本の政府  
 はポルトガルについての意見を変えました。470 年前からの旧識だけじゃない：今、  
 ポルトガルは日本の政治や安全性などについての問題の同盟国です。つまり、互恵の  
 関係です。<sup>3</sup>

ポルトガルと欧州連合は経済危機があるし、ほかの世界の地域（特にアジア）で  
 きかい  
 機会を探さなければいけません。しかも、2011 年の東日本大震災は円高の問題の悪化  
 ゆしゆつ げんしょう  
 させました。その結果、輸出の減少を引き起こしました、特に車会社で。これは日本  
 とポルトガルの最近の関係をやる気にさせたかもしれない。ポルトガルで日本からの  
 ちよくせつとうし せいぞうぎょう ころぎょう おろしうり きょうつう  
 直接投資は製造業にされます、特に車会社、小売業と卸売です。また、共通の主な  
 ゆしゆつぶつ そうしんぐ た もの でんき くるま  
 輸出品（ポルトガルから日本まで）はワイン、コルク、装身具、食べ物、電機、車と  
 しゃりょうぶひん  
 車両部品です。<sup>4</sup>

でも、日本はとても閉鎖的な業務市場です。だから、ポルトガルはもっとアグレッシブな戦略を採用するほうがいいです。そうすることによって、スペインやトルコのようなほかの競合他社から、ポルトガルのイメージを区別できます。その上、ポルトガルの日本の会社にとって、とても煩雑な問題は新しいスタッフ雇う時に、その社員  
 せんもんてき くんれん けつじょ  
 の専門的な訓練をの欠如です。そのために、日本語を勉強しなければならぬかもしれ  
 ません。<sup>5</sup>

ポルトガルでの日本語を学ぶ学生の人数は 2003 年では 172 人、2011 年では 356 人  
 (主にリスボン新大学とアルマダ東洋学センターとポルト大学の文学部) となっ  
 ています。また、ポルトガル語部がある日本の大学は東京外国語大学、大阪大学、京都外  
 国語大学、天理大学（奈良）と上智大学（東京）です。<sup>6</sup>

<sup>2</sup> 東京のポルトガル大使館。2013.

<sup>3</sup> Raposo, 2013.

<sup>4</sup> Ibid

<sup>5</sup> Ibid

<sup>6</sup> Ibid

ポルトガル人の観光客の欠如の理由は日本でポルトガルのイメージが広がっていないためです。だが、最近のインタビューで、ポルトガルで日本の大使は「国と国の関係は速く変わりませんが、ポルトガルと日本は特別な旧縁がある・・・それは、他の国より、利点だと思う」と言いました。<sup>7</sup>

毎年、たくさんの日本文化のイベントがあります。そのイベントはほとんどアニメや漫画やコスプレやビデオゲームなどについてですが、オタク文化のことだけではありません。コンベンションの中で、色々な文化のアクティビティがたくさんあります。たとえば、おりがみと書道と武道のワークショップも行われています。その上、日本のファンにとって、それほど高くない和料理を食べてみる機会です。たとえば、焼き鳥とそばとうどんとたこ焼きと様々な祭りの食べ物を食べれます。ポルトガルで和料理のレストランで出されるのはほとんどすしとさしみとてんぷらです。加えて、そのようなレストランの物価は少し高いです。

日本ではポルトガル人アーティストの展覧会があります。たとえば、ジョアン・ペドロ・ロドリゲスの「レトロスペクティヴ」という映画です。<sup>8</sup>

毎年、両国の大使館は「Rodrigues, o Intérprete」という賞をポルトガルと日本の文化に関連することで働く人に贈ります。<sup>9</sup>

### 2. 3. リスボン大学のアジア研究のシチュエーションについて

リスボン大学での、アジア研究専攻はまだとても新しいです、六年未満それは、その大学の文学部の歴史科の一部です。その科はとても小さくて、アジア研究の学生は自分たちの専攻にそれほどまで注意を払っていません。だから、今、リスボン大学を日本とポルトガルを繋ぐ機関として、考慮することは難しい。

しかし、アジア研究の学生は文学部の中でとてもよい学生の一つです。学部で、最良の平均点をもっているだけでなく、かれらは様々なアクティビティを促進することに献身的です。たとえば アジアの歴史と文化の催し物を計画したり大学とソーシャルネットワークサービス (SNS) の中の機関のアクティビティを促進したりします。

### 2. 4. ポルトガルの中で、アジアと日本研究者のための機会がどこにありますか。

実は、国にはたくさんアジア関連の機関があります。たとえば、Fundação Oriente (東亜設立 -とうあせつりつ) と Centro Científico e Cultural de Macau (マカオ文

<sup>7</sup> Soares, 2013.

<sup>8</sup> 東京のポルトガル大使館, 2013.

<sup>9</sup> *Ibid.*

化と科学センター)があります。この機関はよくアジア関連のアクティビティを作ります。そして、とても一流のセンターです。

この機会のほかに、日本大使館もアクティビティを作ります。時々、奨学金を提供します。このように、アジア研究の学生は海外で勉強することができます。大使館は文化のイベントも作ります。たとえば、毎夏リスボンでは日本の様式の祭りがあります。その祭りはポルトガルと日本の友誼の祝賀会です。

翻訳と通訳は職業を得るための可能な道です。今、ポルトガルでは公式のアジア語の翻訳者がいないと思います。

### 3. ポルトガルの人々の調査

#### 3. 1. 調査の目的

良い研究者になるのために、他の人にインタビューしました。なぜなら、ポルトガルでアジア研究はまだごく最近に始まったので、データがあまりありません。だから、別の人の意見と経験を調べなければならなかったのです。

まず、知っている先生に聞いてみました。下記の先生たちは先生という職業だけではなく、研究者でもあります。先生たちの主な研究分野は中国ですが、日本についての職務経験もあります。そして、級友にも連絡を取りました。なぜなら、級友は私の意見に対して別の考えがあると思ったからです。その時に、卒業生にも参加してもらいました。アジア研究科ではないほかの分野の意見も調べたかったので、日本に住んでいるポルトガル人も探しました。

#### 3. 2. アジア研究者の証言

この研究者は私の専門の先生です。去年の十二月、最初の E-メールを送りました。その時から、エクストラ説明の必要がある時、もっと E-メールを送りました。三回ぐらい連絡しました。

##### A先生

彼はたくさんアジアの言語を話せます。たとえば、中国語、日本語、インドネシア語とアラビア語を話せます。彼は法学校を卒業し、ヨーロッパ研究をしました。それから、アジア研究の分野でいろいろな種類のマスターを取りました。たとえば、アジア歴史と日本の言葉と社会です。そのあとに、中国の歴史のドクターの位を取りました。ですが、この功績はすべて外国で取りました。今、彼は Centro Científico e Cultural de Macau の研究者でありリスボン大学の文学部の先生でもあります。

ポルトガルでのアジア研究者の機会についての、彼の意見は以下（いか）のとおりです。経済危機と人々の変わらなそうな意見のために、彼は今明確な考えを持つことが難しいとっています。しかし、興味深いのはアジアの国の成長です。たとえば、外交、翻訳、貿易、そして観光の分野ではおそらくアジア研究者が必要とされるだろうと彼はっています。

A 先生からすると、すべての場合が異なっているから、研究のモチベーションは自分の探求です。しかし、先生の経験は、知的な好奇心があるし旅行のことが好きだし、言語に興味があるし、研究者になりたかったそうです。唯一の助言は仕事に喜びを持っていることです。研究の中で、色々な道があります：現在のパスを開発できるあるいは、新しいパスを作ることもできます。

**コメント**：この経歴は今のポルトガル人の大学生に実際には無理だと思います。海外で勉強するために、学生と学生に家族の財政投資は大きすぎるから。しかし、キャリアのために、学生は国際奨学金を探したほうがいいと思います。海外の機関はポルトガルのよりたぶんもっと名声があるから。A 先生の最後の意見はだいたいつぎのコーラ先生の似ていると思います。

#### Elisabetta Colla (エリザベタ・コーラ) 先生

彼女は今 Centro Científico e Cultural de Macau の研究者でありリスボン大学の文学部の先生でもあります。彼女はイタリア人ですので、彼女のキャリアについて教えてくださいませんでした。その代わりに、私のレポートをよくするための、提案をしてくれました。

1. なぜアジア研究を選んだのか。なぜ日本に焦点を当てたのか。
2. ポルトガルと日本の文化や歴史における関係について書いてほうがいい。たとえば、言葉の影響など。
3. ポルトガルでのアジア研究の長所と短所。日本での経験後、何を換えられるのか。
4. アジアからどのような仕事の機会を与えられるのか。たとえば、ポルトガルの会社で日本人が働き、日本の会社でポルトガル人が働くなど。

コーラ先生はアジアはそれが一つの世界であると言っています。その上、アジアの国を研究する時、各々の国を別の物として考える必要があります。経済の分野ではアジアの国々は魅力があります。ですが、これは自分の研究を始める一つの理由に過ぎません。好奇心を持つ重要性は進んでその国の文化と言語をすることです。つまり、

アジアに深い情熱を感じることで、これらの特性を持つことだけで、アジアや特にその文化に近づくことができます。彼女はリスボン大学の文学部がイベリア半島で唯一生徒たちの情熱を育むところだと言っています。

**コメント**：もっと自分のキャリアについて教えてくれなかったは残念でしたが、たくさんレポートをよくするためのいいアイデアを教えてくださいました。

### 3. 3. アジア研究専門学生の証言

全部のアジア研究の学生に達するために、去年の十二月専門のフェイスブックページで願いを投稿しました。だから、私の親友の意見だけじゃない、色々な学生の視点を受け取ることができました。フェイスブックで二回連絡しました。

この学生たちはリスボン大学の文学部のアジア研究専門の学生です。このレポートのために、六人の学生が参加しました：三人の一年生、二人の二年生と一人の三年生です。

この学生の主な興味は日本と中国です。幾つかアラビア語とペルシア語も勉強します。まず、日本の興味はポップカルチャーから始めました。そして、だんだん、本当の興味が出てきました。

今、アジア研究の分野は多くの欠点があります。たとえば、国際奨学金が提供されません。政府はもっとアジア研究の分野に投資するべきです。また、ポルトガルではマスターの位を取ることができません。

アジア研究の生徒は特定の先生を持つことがあまりできません。さらに、アジア研究に費やす時間が多くある学生が少ないのです。なぜなら、その学生たちはほかの専門の研究をしたかったからです。熱心な学生が発展の機会や人々の考えを変えることができるかとある学生は考えています。

さらに、ポルトガルで職業を得るためには、ほかの専門、たとえば、コンピューターテクノロジーのようなものなどを学ぶほうがいと述べる学生もいます。

アジア研究では言語を学ぶ機会がそれほど多くありません。三年生の人について、専門を改善するために、カリキュラムの中でアジア国で勉強の機会があるほうがいいです。一年生たちはいろいろな将来のアイデアがあります。たとえば、イギリスやドイツなどでもっとアジアのことが勉強したいなど。すべての学生たちは翻訳のことは一番有望なキャリアだと思うそうです。そして、専門は中国に焦点を当てすぎている同じ意見をもっています。



**コメント**：私にとって、一年生と二年生はリアリスティックな未来の予定がまだ出てきません。その学生の考えはちょっとユートピアのようだと思います。しかし、三年生はもっとリアリスティックな考えがあります。

### 3. 4. アジア研究専門の卒業生の証言

卒業生はフェイスブックで私のお願いを見ましたが、とても直接なことから、パーソナルメッセージでメールアドレスを教えてくれて、後に私は E-メールを送りました。最初の方は去年の十二月にメールを送ったり、もう一つのは今年の 4 月に送りました。カジャールさんに三回連絡しましたが、ジョアンさんに一回だけでした。

#### Kajal Gandá (カジャール・ガンダ)

カジャールさんの一番好きなアジアの国はインドです。だから、ヒンディー語とインドの歴史を勉強しました。中国についてのクラスも受けました。ほかの勉強した言葉はペルシア語とトルコ語です。

マスターの位やドクターの位を取らず卒業しても何の仕事も得ることができません。インターシップの応募<sup>おうぼ</sup>をしても返事<sup>へんじ</sup>がひとつもありませんでした。なので、ほかの専門を学ぶか外国に働きに行くかの選択<sup>せんたく</sup>しかありませんでした。

**コメント**：たぶんこのアジアの地域で仕事を得るのはもっと難しいと思います。ポルトガル人にとって、インドとペルシアは中国と日本よりもっと知られてないと思う。

#### João Geada Santinho (ジョアン・ジェアダ・サンティニョウ)

ジョアンさんはリスボン大学で日本語と中国語勉強しました。そして、その国の歴史と文化のことも勉強しました。今、東京外国語大学の留学生です。彼は「International Student Exchange Program」の一部であります。このプログラムで日本語と国際通信<sup>こくさいつうしん</sup>を勉強しているし、JASSO から奨学金を受け取ります。彼はだんだん日本語が上手になっていると言いました。しかも、その大学のポルトガル語部で協力<sup>きょうりょく</sup>しています。

ジョアンさんにとって、日本で昔からの伝統<sup>でんとう</sup>はまだ生きているし、芸術<sup>げいじゆつ</sup>と技術革新<sup>ぎじゆつかくしん</sup>が多いです。しかし、今、ポルトガルと日本の関係<sup>かんけい</sup>を良くするための、人材<sup>じんざい</sup>は少なすぎると思います。日本で、ポルトガル語の学習教材<sup>がくしゅうきょうざい</sup>はほとんど高いです。そして、ポルトガルで日本語の学習教材はとても少なく、いつも英語で書かれた教科書を使わなければいけません。その上、文化と商業拠点<sup>しょうぎょうきょてん</sup>をもっと開発するほうがいいと思います。

ジョアンさんの意見<sup>しやく</sup>は資格のある先生があまりいないし、ポルトガル語で書いて学習教材もあまりないから、ポルトガルでアジアの研究の開発はまだ遅いです。でも、

今の学生は未来の専門医です。つまり、勉強の後で、その人々は前述した二つ問題を解決するかもしれません。そして、ヨーロッパのポルトガル語のネイティブ先生が少ないですから、外国語としてのポルトガル語の先生になることがいいアイデアです。

**コメント：** ジョアンさんの経験は私に似ていると思います。世界中のポルトガル語の学生はブラジルのポルトガル語を学びます、ヨーロッパのポルトガル語の学生はとても少ない気がします。最近、ポルトガルと日本のビジネス関係は開発しているから、ポルトガルで日本の会社（たとえば、トヨタやトウシバなど）の社員はヨーロッパのポルトガル語を学ぶほうがいいかもしれない。それに、彼が学習教材についてを述べたポイントは興味深いと思います。

### 3. 4. 日本に住んでいるポルトガル人

去年の終わりに、東京のポルトガル大使館にお願いしました。その結果、数ヶ月後、次の人のメールアドレスをあげてくれました。今年の三月、私はその人と連絡してみました、その人はとても忙しかったので、五月の終わりだけに返事をおくりました。三回ぐらい連絡しました。

#### Tiago Mauricio (ティアゴ・マウリシウ)

ティアゴさんはリスボンテクニカル大学で国際関係専門を取りました、専門化は国際安全保障です。専門を取る中で、ブラジリア大学で一学期勉強しました。その後、ロンドン King' s College で戦争研究についてマスターを取りました。2011年4月から2013年3月まで、文部科学省の奨学金をもらったから、京都大学で勉強しました。今早稲田大学で国際関係のマスターを始めました。その上、「Wikistrat」という戦略地政学の会社で働いています。

自分の研究分野をもっと調べるのために、彼は世界で一番大きい討論があるのエリアに引っ越すことが決めました。ティアゴさんにとって、日本の公的サービスはべんりだし、生活になれやすいし、生活の質と教育水準は高いし、日本を選びました。

ティアゴさんの意見はアジア研究の分野は良くなりましたが、まだ制度と構造上の問題があるということです。しかし、新しい貢献を受け入れると思います。言葉を学ぶために、違う文化や宗教などを調査しなければいけません。

彼の期待はこの分野は早く開発します。歴史は研究に対してだけでなく、経済と政治の関心を高めることに対しても重要性をもちます。それについて、新しい研究者と投資家はとても特別の役割があります。

人々は早くからアジアのことに興味があるのために、ポルトガルの中学校と高校でもっとアジアのことを教えるほうがいいです。たとえば、ほかにインドとブラジル、

マカオ、マラッカと長崎です。しかも、ポルトガルの政府は学問的生産性にインセンティブをとるために、アジアと接続があるのポルトガルの会社を支援するほうがいい。

コメント：ティアゴさんの証言はアジア研究分野の外側の視点です。でも、やはり研究者と大学生の大体同じ問題を見つけました。その中で、「早くからアジアのことを勉強する」というアイデアは一番重要ですが、長期的な計画だと思います。

## 4. 結論

### 4. 1. 歴史の研究の重要性

最後の数年間、私は言語から歴史に興味を変えました。なぜなら、私もあまりわかりませんが、一番大切な点は歴史はもっとダイナミックな分野だと思います。歴史の中で、色々な研究の道がある、例えば、政治や宗教や文化などです。その道は相互接続ができます。言語の研究も歴史の一部である。だから、ダイナミズムがたくさんあると思います。

ポルトガルと日本は特別な関係があると思います。その関係は古いし、両国で大きい影響を与えました。それも日本大使の意見です。しかし、両国で、その影響はまだあまり理解されていないと思う。例えば、私は日本にいた間、「金平糖」はポルトガル語の言葉たということを知っている日本人を知りません。その上、ポルトガル人は毎日使う「茶-chá」は日本語と中国語の言葉だということも知りません。

だから、両国の関係を良くするために、共通の歴史を研究しなければならないと思います。過去を勉強するなら、現在を良く分かるかもしれません。そして、歴史の研究は文化を伝播する方法です。両国の文化を良く分かるながら、もっと強い関係を作ると思います。

私にとって、最近、ポルトガル人のアジアについての考え方はだんだん変わっています。財政危機を脱するために、四・五年前から中国がポルトガルに投資しています。その結果、中国と他のアジアの国について報道機関に適切を出てきました。

私の祖母はこの推移の例です。アジア研究の勉強の始めに、祖母の意見は「どうしてそんな専門？有用性が全然ないよ！趣味だけだ」と言ったもとでした。でも、私と祖母は特別な近縁があるので、話す時たくさんアジアについてのことを教えました。だんだん、祖母には新しい視点が出てきましたから、今の意見は「ああ、アジア研究の選びはあなたの生活の最良のアイデアだ！おばあちゃんはうれしいだ！」と言います。

#### 4. 2. 日本研究者の機会

今、ポルトガルで、アジア研究はあまり開発されていません。まず、古い世代はアジアのことに興味がありません。だから、この研究分野で仕事がありません。しかし、だんだん、アジアはもっと重要性が出てきます。だから、一番主なエリアは翻訳と通訳です。これは学生と先生と私の意見です。でも、ほかのエリアがあります。たとえば、歴史の研究や政治なども可能なオプションだと思います。

ポルトガルの状況はどんどん変わっていると思います。だから、人々の視点も変わっています。しかし、ポルトガルでアジアの研究が他の分野の信頼性に達するために、政府や教育システムなどアジアのことをだんだん浸透させるほうがいいと思います。しかも、アジア研究とほかの研究分野を組み合わせるのもいいアイデアだと思います。

とにかく、そんな推移は即時ではありません。構造変化を要するから、長期かかるかもしれません。しかし、その推移が速く始めれば始めるほど機会はすぐに開発されると思います。

#### 4. 3. 将来の研究者の生活

このレポートを書くために、自分の分野について良く調べなければいけませんでした。その結果、インタビューを読んだ後、私の視点は広くなりました。特に、「将来の私の社会的な役割はなんですか」ということについて考えていました。

私の公的な経歴は日本とポルトガルの関係の歴史の研究者になることです。特に、十六世紀の日本にいた宣教師と戦国時代の三人の日本統一者（織田信長、豊臣秀吉と徳川家康）の関係について研究したいです。なぜその時代を研究したいかという、私にとって、その時はとてもわくわくさせるものであり、今の関係を創りあげたものだからです。自分の「研究者性」を確立した後で、私の知識を伝えたいです。

オフィスの仕事と研究者に対していつも宿題があります。研究者の仕事は事務所だけで止まりません：家でもっと調べなければいけません。また、研究者はほとんど教師ですから、授業の準備もしなければなりません。その上、研究のために、授業を教えられるし、会議を出席をできるし、色々な所に旅行をできるから、力動的な仕事だと思います。忙しすぎる感じがあるかもしれないけど、知識と文化にかんすると、とても実りがありそうです。A先生とコーラ先生の経験はそんなイメージを伝えます。

もしこの構想<sup>こうそう</sup>が叶<sup>か</sup>わなかつたら、外国人にポルトガル語を教えることは現実的な構想だと思ひます。ですが、これは私の夢である研究者になることをあきらめたわけではありませぬ。なぜなら、ポルトガル語の先生になることは日本で働くことの一つの機会だからです。これは私が日本の文化や歴史を知る一番の近道<sup>ちかみち</sup>だからです。これによつて、研究者への道<sup>みち</sup>が開けるからです。

#### 4. 4. 自分のこれからの予定

国に帰つた後、専門を終わらなければいけません。もう一年ぐらひリスボン大学の文学部で勉強します。最終学年をしながら、文学部で日本語とポルトガル語の非公式な会話クラブを設けるつもりです。うちの大学にポルトガル語を学ぶ日本人がいるから、そのクラブの目的はその日本人をポルトガルの生活になれるためにサポートしてあげることと言語の練習することである。

後で、マスターを取りたいです。どんなマスターかまだ分かりませぬが、第二言語をとしてポルトガル語を教えるのは一番尤もらしい選択と思ひます。ポルトガルでアジア研究のマスターもあるけど、そのマスターは私立大学にだけありますから、学費は高すぎます。しかも、そのマスターの授業のよていは私の今の専門のをだいたい同じだと思ひます。

研究者になるために、たぶんもう一度外国で勉強しなければならぬ。でも、とりあらず、自分の国の機会を用いるつもりです。

## 5. 文献リスト

- Tavares, Eduardo. 2004. “Alguns Portugueses no Japão do Século XVI” . 5月12日にアクセスした。 (<http://www.aikideai.com/article.php?sid=13>)
- Da Silva, J.P. Oliveira. 2010. “Luís Fróis, o primeiro japonólogo europeu” . 5月12日にアクセスした。 (<http://expresso.sapo.pt/luis-frois-o-primeiro-japonologo-europeu=f587349>)
- ポルトガル日本大使館. 2006. “Relações Bilaterais - Relações entre Portugal e o Japão” . 5月7日にアクセスした。 (<http://www.pt.emb-japan.go.jp/Relacoes%20Bilaterais.html>)
- Raposo, Pedro A. 2013. “Portugal and Japan: A New Course or Just Historical Momentum? - Analysis” . 5月5日にアクセスした。 (<http://www.eurasiareview.com/01042013-portugal-and-japan-a-new-course-or-just-historical-momentum-analysis/>)
- Soares, Sérgio. 2013. “Portugal devia aproveitar a boa imagem que goza no Japão” . *Jornal I*. 6月27日にアクセスした。 (<http://www.ionline.pt/artigos/mundo/portugal-devia-aproveitar-boas-imagem-goza-no-japao>)
- 東京のポルトガル大使館. 2013. “MNE Português em Visita Oficial ao Japão” . *Tokyo Dayori*, 3月25日。 (<http://tokyodayori.blogspot.jp/2013/03/mne-portugues-em-visita-oficial-ao-japao.html>)
- *Ibid*, “Cinema Português em Destaque no Japão em 2013” . (<http://tokyodayori.blogspot.jp/2013/03/cinema-portugues-em-destaque-no-japao.html>)
- Varley, Paul. 2000. “The Country Unified” . In *Japanese Culture*, edited by Paul Varley, 149–152. Honolulu: University of Hawai’ i Press.
- Oliveira e Costa, J.P. 1999. “Oda Nobunaga e a Expansão Portuguesa” . In *O Japão e o Cristianismo no séc. XVI - Ensaio de História Luso-Nipónica*, 107–128. Lisbon: Sociedade da Independência de Portugal.
- Loureiro, Rui. 1990. *Os Portugueses e o Japão no séc. XVI - primeiras informações*. Lisbon: Comissão Nacional Para as Comemorações dos Descobrimientos Portugueses - Ministério da Educação.
- Oliveira e Costa, J.P. 1993. *Portugal and Japan - the Namban Century*. INCM: Portuguese State Mint.

スペイン語・日本語の  
通訳者になるために  
どのような条件が必要か

カルロス・ロドリゲス

## 目次

1. 問題意識	1
1. 1 通訳者になりたい理由	1
1. 2 仮説	2
2. 通訳の重要性	4
2. 1 通訳の歴史	4
2. 2 日本とチリの関係	5
3. 先行研究	5
3. 1 通訳の形態	6
3. 2 通訳の種類	7
3. 3 よい通訳者になるための必須条件	9
3. 4 通訳の職業倫理	10
4. インタビュー	11
4. 1 フアン・ルイス・ペレヨ先生	11
4. 2 バレンチナ・コドセド	14
4. 3 あき・いけがみ	16
5. 結論	18
5. 1 インタビューのまとめ	18
5. 2 通訳者の望ましい条件	19
5. 3 通訳者の生活	21
6. 参考文献	23



## スペイン語・日本語の通訳者になるためにどのような条件が必要か

### 1 問題意識

#### 1. 1 通訳者になりたい理由

私は現在、翻訳者になるために勉強しており、将来自分が本当に何をしたいのかということについて考えている。チリは日本から非常に離れたところなので共通点は少ない。言葉、文化、生活スタイルなどが違っており、チリで日本と日本語について英語とアメリカや英国のものと比較すれば普及していないと思う。したがって、大学に入学した頃から将来できれば日本とチリのかげ橋として、両国の相互理解に協力したく、翻訳者になれば最も賢明な方法だと思った。

しかし、真剣に考えれば翻訳者として働くことがよいが、チリでは日本語をスペイン語に訳するという仕事ができるか不安に思っている。昨今アジアの国は極めて発展しているので、次第に日本語や中国語などが普及してきたが、南米ではブラジル以外にまだ普及していなく、翻訳者としての仕事の機会を得ることは少ないようである。だが、通訳者としてならおそらく機会は多くなるかもしれない。そのため日本語からスペイン語への通訳者にもなれば私自身の機会がよくなり、好むことを使って働くことができる。

大学に入学した時には日本語が全然分からなかった。最初にやめたいほど難しい言葉だと思っていたが、徐々に把握していくと同時にとても好きになった。今は5年後の自分の将来について真剣に考えている。そして、日本語を使って仕事をしたいという結論に至った。なぜかという、日本語に興味を持ち、好きになった上で、せつかく5年間も一生懸命学習したので、その努力が水の泡になることは避けたいからである。

サンティアゴ大学で翻訳課程は5年間で、最初の2年の間スペイン語、英語、ポルトガル語、日本語を勉強し、3年からポルトガル語と日本語のどちらかを選ばなければならなかった。1年生の時、日本語は馴染みがなく、習いにくい言葉だと思った。加えて、新聞、小説などを読んだり、日常生活ができるようになるためには少なくとも漢字2千字の習得が必要だと言われると途方に暮れる思いがした。

私はある同級生と違い、入学する前には日本語が全く分からなかった。平仮名、片仮名、漢字は未知であった。1年生と2年生の時は、日本語の理解が上手くいかず、悪い成績だった。だが、日本に来るのは私の夢の一つだったので、3年生の時から、奨学金がもらえ

るように頑張り始めた。まず、漢字習得に重点を置いていった。そして、漢字が覚えられると文章が読めたので興味が出てきた。

そのように夢が叶うように毎日勉強したが、多分私より日本語が上手な人がいた可能性があったので、5年生になるまで待っていた。待っていれば私の日本語のレベルが上がり、奨学金をもらう可能性も上がったからである。漢字学習によって、日本語への興味を引き出されたので、日本語の中で最も大好きなことは漢字である。漢字を使わない外国人として漢字が面白いと思ひ、意外に私にとって覚えやすいことである。

チリでは日本語の翻訳者の仕事の機会は多くなく、日本語で働ける仕事をしたければ他の選択肢を考えるしかないと思っており、その結果、通訳者という職業を考えた。去年の1学期、サンティアゴ大学で通訳についてのある科目を取得した。第一印象は翻訳より難しい仕事だったにもかかわらず、面白すぎるとも思った。通訳者は翻訳者より活発な活動をしており、共通の言語を持たない人々をすぐ近くでつなげる役割は素晴らしいと思う。また同時にそのような通訳者の持つ能力には感動した。

一方で、日本語とスペイン語の優れた通訳者になるためにどのような条件が必要かという問いが浮かんた。サンティアゴ大学での通訳者を志望する者を養成する先生によると大事なことは大声で話すことや明確に情報を伝えること、人前でいつも冷静にしていることである。しかし、世界情勢は著しく変化し、依頼者は特別なスキルを通訳者に求める可能性がある。

## 1. 2 仮説

新しい外国語を学び始める学習者のうちではその学んでいる言葉をネイティブスピーカーと同じように話すことが大切だと考えている学生が少なくないそうである。また、その目標を達成するためにある程度自分のアクセントを変えなければならないという断言がよく聞こえ、往々にそうした問題を中心にし、他の重要な範囲に注意を払わないかもしれない。例えば、文法、発音、語彙などである。

だが、アクセントは発音と同じことと考える者があるが、実際には違こととして扱える。大まかに言えば発音は一つの音の仕方である。一つの例を挙げれば、チリでは「y」という英文字は/j/で発音するがアルゼンチンのある地域では/ʃ/で発音する。それらのうちでどちらがいいかは言えない。なぜかという、どちらも正しく国によって一つの英文字

は様々な方法で発音することができる。しかもその発音の区別はメッセージの意味を全く変えないからである。

しかし、自分のアクセントはある程度自分の文化やアイデンティティを含んでいるため、相手が情報さえ分かれば、アクセントを変えなくてもよい (Laroy, 1995)。これに対して発音は大切で、留意するほうがいい。ある外国語で発音の相違によって文の意味が変わることがあるのである。

一方、アクセントはたぶん二つの意味があるかもしれない。Diccionario de la Real Academia de la Lengua Española (RAE)によればアクセントはリズムやイントネーションなどと関係がある。言い換えれば、一定の地域、国などの話し方の独特な特徴が混ざり、ある人のアクセントを聞くとその人の出身地が分かることである。その二つ目の意味はスペイン語として例を挙げれば、単語の中のもっと強く発音する音節はアクセントと呼ばれており、英語の stress という単語に当たる。日本語はアクセントではなく、イントネーションの言語だと言われているので、この本稿においてアクセントが現れると、一つ目の意味で言っている。

それに発音と同じようにアクセントは国の言葉によってバラエティーがある。例えば、コロンビアで話されているスペイン語は、ウルグアイで話されているスペイン語と比べ、単語や表現だけでなくアクセントも違っている。また、イントネーションは関連した音の調節により、話者の感情、出身地、文の意思の相違を表すことができる。例えば、疑問、肯定文、否定文などである。しかし、本稿で日本語のイントネーションについて取り上げる時は、その疑問などの文の最後のイントネーションでなく、一つ一つの言葉の中のイントネーションとして使用する。

私はアクセントよりもっと大切な条件を中心にすべきだと考えている。アクセントは人によってあるアクセントより他のアクセントのほうが好きだという気持ちを抱くことは事実にはちがいないが、通訳者として働くためには重要ではない。異なったアクセントで話しても明確に伝えたい情報を伝えられるのである。その代わりによい通訳者になるために必要な条件は情報を理解し、明確に相手に伝えることを中心にしなければならず、その言語の語彙と文法についてよく知っているべきではないだろうか。最後に言語と具体的にあまり関係がないが、同様に大事だと思うことがある。それは例えば、パラ言語（言葉ではない方法で情報を伝えることである。例えば、声色、大声で話すこと、文と文の空間を正しく空けることなどである）、カリスマ性（相手によいイメージを与え、雰囲気をよく

し、コミュニケーションを愉快にする）、プロ意識（会合に間に合うこと、仕事を真面目にすること）と発音法（各音は的確に発音し、話している話題を誰でも理解できること）などである。

本稿を通し通訳者として働く人の経験の視点から、ビジネスのよい、スペイン語から日本語への通訳者の条件は何かという問いを明らかにしたいと思う。

## 2 通訳の重要性

### 2.1 通訳の歴史

通訳者という職業は最も歴史の古い職業であると考えられているだろう。古代から、ある民族や人々が他の民族と交流や貿易、外交などをするために通訳が使われた。日本でも世界中と同じように通訳は歴史的に重要な役割を果たし、この役割は主に帰化人、僧、外国の貿易に携わっていた商人によって果たされた。鎖国政策の間、日本はオランダ人と中国人とを結ぶ通訳者が必要であったので、次第に通訳の職制が確立していった。彼らは日本と西洋の世界とのかけ橋となり、持っていた語学力が日本の近代化に強く貢献したと考えられる（真木子、2002）。

しかしながら、近代のいつから通訳という職業の必要性が認知されてきたのか。真木子（2002）によると、第一次世界大戦後、イギリス、アメリカ合衆国といった英語が使われる諸国の代表者がフランス語ができなかったので、通訳者が必要になった。その時、通訳は逐次通訳であった。数十年後、第二次世界大戦後、ナチスの戦犯を裁くためにニュルンベルグ裁判が行われ、その裁判で同時通訳が初めて導入された。なぜかという、同時通訳は逐次通訳に対して時間が大幅に短縮できるという利点があるからである。

同時通訳の利点が認知された後で国際会議において徐々に同時通訳が定着し、現在、同時通訳のための装置が次第に改良され、更に使いやすいものになってきた。

今日グローバル時代であるので、情報はいつでもどこからでも世界中から得られ、科学や経済、技術などの分野を発展させていく。しかし、これらの情報や発展は度々自分の母語ではないので問題になる。加えて、科学などが発展するのに伴って貿易や交流などで国家間の外交関係はとても重要になった。したがって、この新たな知識が分かるように、諸国の相互理解を到達するために、書物の翻訳と会議などの通訳の必要性が認知されてきた。

## 2. 2 日本とチリの関係

チリと日本の関係は、1887年にチリと日本の間に修好通商航海条約が締結され、19年後の1906年にその条約に批准し終わった頃から始まった。また、日本はチリのエスメラルダ練習帆船という船舶を購入し、「いずみ」と改名し、「いずみ」船舶は日露戦争で重要な役割を果たしたようである。しかし、第二次世界大戦で二国の外交関係が断たれ、戦後の1952年にもう一度二国の関係が結ばれた。その頃から二国は様々な小規模協定を調印した。例えば、1978年に技術提携という協定を調印し、1988年にチリにおいて独立行政法人国際協力機構の創立の協定を調印し、そして2005年に「Assessment of Carbon Fixing in Chilean Forest Ecosystems」というプロジェクトを協定した。その上、2007年に日本・チリ経済連携協定を発効した（以上、この段落：Embajada de Chile en Japón、2013）。

日本・チリ経済連携協定を発効して以来、チリ中銀が2011年に対外貿易の指数について行なわれた調査によれば、日本はチリの第二の輸出相手国であり、2010年の同じ期間を比較すると、日本に対するチリからの輸出は49%増加した。また、一方では日本からの輸入も26%増加した。

一方で、2010年に在チリ三菱商事の支店の山東理二社長はインタビューでチリの自動車市場の拡大はブラジルより著しく、将来チリ・日本の二国間の中で日本が環境保全、新たなエネルギー源の発展、ナノテクノロジー、ロボティクス、宇宙開発などで重要な役割を果たすはずだと述べていた（以上、2つの段落：Biblioteca del Congreso Nacional de Chile、2013）。

この状況を見ると、二国の外交関係と貿易関係、そして、技術、環境などの分野はますます増加していくようである。二国間関係が続いていると同時に上述した協定やプロジェクトを成立させるために言語の問題を解決しなければならないため、スペイン語・日本語の優れた翻訳者と通訳者の必要性が増加するだろうということがわかった。

## 3 先行研究

通訳という職業はスポーツ（野球スポーツマン、サッカースポーツマンなど）、医療（心臓病学、小児科、老人医療など）と同じように類別があり、様々な形態や種類がある。これらの形態や種類は各々別の条件が必要だが、さらに依頼者から求められる条件がある。これについて概観してみよう。

### 3. 1 通訳の形態

真木子（2002）は厳密に言えば通訳の形態は三つであると述べている。これらは逐次通訳、同時通訳とウイスパリング通訳である。まず、逐次通訳とは発言者が一文を発表し、そのあと通訳者が目的語で訳すということである。しかし、時々発言者は一文ばかりでなく、5分や10分まで止めずに発表することもある。したがって、この形態の求められる条件は主に記憶力と要約力である。なぜかという、発言は長時間であることもあるので、そのとき全ての内容を訳すのではなくて要約すれば大丈夫だからである。これは非常に困難であるが、メモ取りの技術を習得すれば可能になる。話しを聞きながら内容の大切なことについて冷静にメモをとり、同時に頭の中で内容と情報を整理し、その上、話し手が話しを終えると同時に通訳者もメモ取りを終えなければならないといった条件がとても重要である。

一方では、国際通訳の9割近くは同時通訳で行われている。この通訳はヘッドホンから流れてくる話を同時に別の言葉に訳す形態である。そして、通訳者は静かな部屋で会議の様子を見ながら、ヘッドホンを通して話を聞き、マイクロフォンに向かって訳す。最後に通訳者の声はレシーバを通して聴衆の耳に届く。この形態では聞いている話にどのような表現がいいかということについて考える時間があまりないので、予測（ある言葉や文の後で発言者が何を言うだろうかということである）と時間を利かせるといった条件が非常に求められる。

最後にウイスパリング通訳は聞き手の耳元で小声でする同時通訳である。聞き手は1人の時も数人の時もある。この通訳形態で求められる条件は話し手の声自分自身だけに聞こえ、聞き手に適当なボリュームを調整しながら訳すことである。なぜなら、大声で訳せばおそらく訳している時に話し手の話の内容が聞こえなくなり、そして自分自身の声が邪魔になる恐れがあるからである。現在、この通訳形態はあまり行われませんが、小さいホールや同時通訳の装置を備えないところでこの通訳形態が行われる。

この三つの形態の中から、個人的に言えば三つとも困難だが、多分私自身には同時通訳が最も難しいと思う。日本語とスペイン語を考えると、異なる文法や構文規則があり、同時通訳者は短時間で流暢に分かりやすくメッセージを構成しなければならない。その上、スペイン語から日本語にある文を訳せば理解能力と多くの語彙が必要である。なぜなら、話者が発言している間に、早速他の言葉で正しい相当語句を見つけなければならないからである。しかし、活動的なので、最も面白い形態だと考える。

現状としてチリでは日本語に関する通訳をあまり行わないが、行う場合は逐次通訳である。しかし、貿易などの関係がよくなり続ければ次第に同時通訳の依頼も増えるであろう。

### 3. 2 通訳の種類

真木子（2002）は様々な種類を定義し、詳細に説明しているが、ここではチリと日本の間に将来現実的に通訳者として働く種類だけを扱い、まとめる。

#### ▶ 会議通訳

会議通訳は学術会議、シンポジウム、政府間交渉などで用いられるが、会議通訳者は正式な会議の通訳をするだけでなく、演説、講演、講義、企業内セミナーなどでも活躍できる。聴衆は少数人から千人以上であるので、聴衆の前でプレッシャーに負けず、落ち着いた通訳できるという条件は必須である。また、扱わなければならないテーマは政治、経済、科学、テクノロジー、ビジネス、文化、芸術なので、そうした様々なテーマに関しての内容をよく理解しておくことが求められる。そこで、そのテーマに関して事前にどう準備するか、そしてどう資料を入手し、使うかは通訳者の責任である。

#### ▶ 通訳ガイド

日本で国土交通省が行っている試験に合格した人だけガイドとして働くことができる。通訳ガイドが外国人に対する職業なので、通訳者は国の歴史や文化、観光スポットを深く知らなければならない。この職業で通訳者は旅行者がよい思い出作りを手伝うことから、日本では「民間外交官」と呼ばれている。したがって、この種類の通訳者は他人と働くので、語学力だけではなく人間としての質の高さも非常に必要である。

一方で、チリと比べると、チリではこの仕事は通訳者だけでなく、外国語ができる人もガイドとして働くことができる。

#### ▶ 司法通訳

司法通訳は犯罪に関与した外国人に対する通訳である。犯罪に関与した外国人は検挙される場合、検察庁に送られ、そこで取調べを受け、そして必要であれば裁判所で審理されて判決を受ける。しかし、このプロセスは非常に困難で言葉を理解しない場合被疑者または被告人が不利益を受ける恐れがあるので司法通訳者がつく。

通訳者は日常会話だけではなく、少なくとも裁判のプロセスや、弁護士、裁判官、検察官が使っている専門用語を知っておくことが極めて必須である。なぜかという、通訳

者は通訳ミスがあれば裁判を大混乱に導いてしまい、ましてや、被告人の判決を左右してしまう結果になることもあるからである。しかも、司法通訳者は優れた言語変換能力と同時に倫理的思考能力が求められる。この種類の通訳は社会的責任の重い仕事なのである。

▶ 企業通訳

現在グローバル化のもとで、国と国の関係は日々強くなる。また、国々の企業が海外に進出し、生産工場を持ち、世界各地から輸出入が激増している。このようななかで契約や交渉などで通訳者の必要性が認識されてきた。

ある企業から通訳を依頼される時、知っておくべきことはまずその企業の概要、経営理念と経営方針である。そうすれば、将来相互理解がよくなるからである。

この種類の通訳者の必須条件はある二つの企業の商業の仕方を深く理解することである。また、即断・即決も求められる。なぜならば、おそらく両社は契約に関して観点を主張し合いながら、激論になる恐れがあり、通訳者はその時とりなさなければならないからである。

▶ 医療通訳

医療通訳は公立病院で治療を受けている外国人のための通訳である。そして、おそらく当然であるが、通訳者は医学用語や病気に関する知識が必須である。世界各地での移民が次第に増えてきたので、病気について明確に伝達してもらいたい外国人患者も増えてきた。したがって、正確性が非常に必要である。体のどの部位にどのような異常な状態があるか、そして医師の診断や治療を明確にする必要である。

これらの種類を分析した後で、将来、現実的にどれが最も必要とされているか。チリでできる通訳について言えば、最も必要とされているのは会議通訳かもしれない。日本の外務省によるとチリに住んでいる日本人の数はとても少ないということである。だから、司法通訳、医療通訳と通訳ガイドの種類が現在、必要でないと言える。よって、日本語をスペイン語に訳すことが必要なら、小さいイベントや日本国大使館などで行われるイベントである。

しかし、最近チリと日本の貿易における関係が次第に強くなってきたので、将来会議通訳だけでなく、企業通訳の必要性が大きくなるのを予想できるのではないだろうか。

一方、日本に住めば、スペイン語を日本語に訳す種類は主に司法通訳と医療通訳に違いない。日本の発展が大幅であるので、毎年世界中からの移民は急増していると共に病院な



どで日本語ができない移民のニーズと日本で外国人が犯罪に関与した事件も増加しているのである。例えば、裁判所の平成 25 年版に「ごぞんじですか 法廷通訳—あなたも法廷通訳を—」の小冊子によれば、平成 23 年に犯罪に関与した外国人の総数 2,658 人のうちでスペイン語を話した人が 7,6%であった。

このデータから司法通訳に有望な将来があるかもしれないということが分かった。

### 3. 3 よい通訳者になるための必須条件

よい通訳者になるためには第二言語、つまり訳す言葉はもとより目的言語も大切である。なぜかという、第二言語の発表の内容を徹底的に理解するだけでは十分ではなく、自分の言語で簡易に同じ意味とニュアンスを伝達しなければならないからである。そして逆に自分の言語から他の言語に訳す時に、同じ原則が機能する。

前で述べたように、通訳の職業のうちに様々な種類があり、一つ一つの種類は独特な条件が求められている。普段「よい通訳者の条件は 3 つである。それは迅速さ、正確さ、そしてわかりやすさである」と言われている（真木子、2002、p. 20）。迅速さは逐次通訳であれば、話者が発言し終わると、同時通訳であれば、話者が発言しながら頭の中で目的言語の相当語句を早速探す能力である。正確さはその探した相当語句を数多くの選択肢の中から文脈により、意味、ニュアンスなど最も正しく選択することである。最後にわかりやすさはテーマや目的聴衆に基づいて、訳すということである。例を挙げてみると、ある演説は宇宙の天体に関するテーマであれば、まず目的聴衆を考えなければならない。聴衆は一般の人々の対象である場合、簡潔に日常語彙を使って難しい表現を避けながら、説明する一方、専門家向けの演説である場合は、もちろん専門用語を使わなければならない。

しかし、これらのみならず、他の条件にも注意をすべきだ。それは真木子（2002）とチュエ・ジョンファ（2001）によると、論旨を把握する力、豊かな表現力と豊かな知識だということである。簡単に言うと、最初の条件は話者の発言を聞きながら独立した単語を中心にせず、全体の内容を把握し、すぐに頭の中でその内容をまとめ、相当語句を探し始めるということである。次の条件は主に自分の母国語と関係する。豊かな表現力は前段落の説明のように、外国語での発言の内容がわかったとしても、目的言語で通訳できなくなれば無意味な活動になる。また、訳す時に目的言語で同じ

言葉と表現を避けたほうがよく、できる限り豊かな同義語を使えばプロ通訳者のイメージを聴衆に与えられる。また、豊かな知識に関しては数多くのテーマについて知ることが通訳者に求められている。一つのテーマ・トピックの中では他の語彙やテーマが出てくる可能性があるため、豊かな知識を持てば、困るシチュエーションを（知らないテーマ・内容、専門用語など）避けやすくなると私は思う。しかも、通訳の前に準備時間が減少できることもあるため、通訳者は大切な時間をセーブできる。

### 3. 4 通訳の職業倫理

チュウエ・ジョンファ（2001）は通訳者の望ましい職業倫理について述べている。これら 7 つのルールは通訳者として雇われている時、通訳の内容、演説者・講師などの軽薄な話でも秘密として守り、漏らしてはならないということである。詳細に整理してみると、次の通りである。

- 通訳者として仕事をする時、非公開会議で得た秘密は絶対に漏らしてはならない。
- 通訳者として仕事をする時に知った秘密を個人の利益の為に使用してはならない。
- 自分の能力以上の能力が求められる通訳は受けない。一旦担当した通訳の場合は専門家として最善を尽くすという道徳的責任をとる。
- 同じ期間に 2 件以上の通訳をしない。
- 国際会議の通訳者として品位を損ないうる通訳は受けない。
- 職業の名誉を傷つける様ないかなる行為もしない。
- 他の通訳者たちに精神的な援助をし、同僚愛を発揮しなければならない（チュウエ・ジョンファ、2001、p. 91）。

この倫理的な能力は勉強で得られる能力ではないかもしれないが通訳者として兼ね備えていなければならない条件だと私は思う。通訳の職業は別の職業と同じように道徳を厳守しなければならない。通訳するテーマが大手の企業の間での計略や金額かもしれないので、通訳者は依頼者に、扱った情報を通訳の後で漏らさない、という安全を伝えなければならない。

だから、最も大切なことは真面目に通訳という仕事をする事だと思う。そのようにすれば、通訳という職業に関しての評価を守ることができる。

#### 4 インタビュー

現実的なチリと日本でのスペイン語・日本語の通訳の状況を知るために、通訳者として働く経験がある人にインタビューをした。このインタビューを通して日本語・スペイン語の通訳者に求められた条件は通訳者になるための共通の条件と異なるかどうか、そして、大学などで教えられていない条件が必要かどうかを明らかにしたい。また、私は将来通訳者になるために、3人の経験から役立つ情報やコツをもらえればよいと思う。

##### 4.1 フアン・ルイス・ペレヨ先生

- フリーランス翻訳者（日/英⇄西）である。チリのサンティアゴ大学を卒業してから、2001年に日本の文部科学省の国費留学生として東京大学の言語情報科学専攻の修士号を取得し、2005年に帰国した。現在、サンティアゴ大学で翻訳科目と翻訳者向けのパソコン利用の科目も担当している。このインタビューは4月と7月の間に3回メールで行なった。

##### 1. 通訳として働く者と通訳になりたい者にはどんな条件が必要と思いますか。

まず、よい通訳者（翻訳者も）は有識者であると思います。通訳者として働く時は様々なトピックについて通訳させられるのです。そして、難しいことなんです、とても大切なことは自分の思想信条を黙らせられて、通訳に悪影響を及ぼさないと思っています。今まで、経験がありませんが、一つの例を挙げれば煩わしい話題は捕鯨だと思います。他の条件はよい明確な話し方と、聞き手に情報を伝える場合に共感があり、翻訳できない語彙や異文化の問題があれば短く正しく説明できるスキルです。

##### 2. 日本人のように発音、イントネーションとアクセントがあるという条件は必要だと思いますか。

その三つの条件はあまり必要ではないと思います。なぜかといえば、チリで日本語からスペイン語への通訳者がほとんどいないので依頼者は日本語がよく話せる者だけ探し、通訳してもらいたい話題についてある程度知っている場合十分だからです。

現在は大切な条件は責任感、プロ意識とグループで働くやる気だと思います。

**3. 通訳者の発音とイントネーションは、訳した内容の理解度に影響を及ぼすと思いますか。**

それは日本で重要かもしれないがチリでは必要ではないと思います。ここでは日本人はコミュニケーションを果たしたいことだけ求められ、チリ人は評価できないのです。おそらく働いたことがある日本人は私の発音とアクセントに違和感を感じたかもしれないが、一回も言われませんでした。

**4. 最後にこれらの条件の中から一番大切な条件から並べていただけませんか。\*a~gの順番は私自身の意見です。**

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| a) 日本語をよく知っている | e) 日本人のような発音       |
| b) 情報は明確に伝える   | f) 日本人のようなイントネーション |
| c) カリスマ性       | g) 日本人のようなアクセント    |
| d) 声の高さ        |                    |

1. 情報は明確に伝える
2. 日本語をよく知っている
3. カリスマ性

残りの条件は、通訳した時、聞き手からのコメントとしては要望されたことがあるが、依頼者から今まで明示的に要望されたことはありません。

**5. チリではどんな通訳の形態が最も必要かと思いますか。**

私は今まで逐次通訳だけ見た・したことがあります。しかし、それは同時通訳できる人がいないだろうからです。

**6. 通訳という職業の中で様々な種類がありますね。例えば、スポーツ通訳、司法通訳などです。先生の視点からチリでは最も依頼されるのはどれですか。そして、将来、他の種類で働く機会は多くなると思いますか。**

チリでは日本語・スペイン語の通訳はあまり依頼されていないと思います。依頼されている時は主に講演、ビジネス訪問などです。未来他の種類で働けるかどうかわかりません。おそらく両国の貿易関係がもっとよくなれば、日本語・スペイン語の通訳は必要になるかもしれない。だが、チリ人も日本人も英語で相互理解できると思っているのも、たまに通訳者は必要でないとも思っているが、普通はそうではないと私は思います。チリ人の英語はあまり立派ではなくて、日本人の英語はチリ人のと比較すると、もっと正しいですが、チリ人にとって分かりにくいからです。

**7. 最後に先生のいくつかの経験を書いていただけませんか。そして、その経験についてどんな形態でしたか、どんな種類でしたか、最も楽しいと難しいことは何でしたか、そしてある通訳の前にどうやってそのテーマなどを準備しておきますかという点を考えながら書いていただけませんか。**

まず、前に答えたように今まで同時通訳はしてなく、逐次通訳だけしています。準備のことですが、常に依頼者にテーマに関する資料を頼みますが、もらわない時には、テーマについてよく聞き、自分の家でそのテーマに関して日本語とスペイン語で書いた書類をよく調べます。そして、その後、両言葉の語彙を探し、語彙表を作ります。

通訳者としてのいい経験は小さい飛行機でチュキカマタという鉱山を飛んだことです。私は他の4人とおり、彼らは鉱山の写真を撮りたかったので、いい写真を撮るための要求を操縦士に通訳しました。なぜいい経験だったかの理由は面白く、そのようなことはあまり依頼されていないだけです。

一方では悪い経験はあるチリ人の重役が少し失礼に話していたことである。特に私に対してそのように話していましたが、彼の話し方は普通に失礼でした。例えば、自分の労働者、日本人のことについて悪口などを言いましたが、私は通訳しなければならなかった時に正しく話しました。最初にその失礼なことを通訳しませんでした。私の顔は少し変だったから、後で聞かれました。その時、彼の言いたいことを言い換えてやわらかく説明しました。

**コメント:** 先生の意見によれば、チリで通訳者があまりいないので依頼者の希望される条件は日本語をよく知っており、通訳してもらいたいトピックに関してある程度知っていれば充分である。そして、よい通訳者の条件は私と同じように明確に情報を伝えることが大事だと思っており、アクセントは必要ではなくて他の範囲を中心にしたほうが良いと思

っている。通訳者は様々なテーマについて知るべきだと思う。なぜなら、会議の流れの中で、たぶんそのテーマと関係のない話に転換することもあるからである。そして、失礼な重役の経験のようなことは通訳者の経歴に多くあるはずなので、適切な態度が必要だと思う。

#### 4. 2 バレンチナ・コドセド

- サンチアゴ大学で翻訳者になるために勉強し、去年卒業した。私の同級生だった。現在翻訳者のフリーランサーとして働いており、チリの在日大使館に勤務している。今まで通訳者としても働いたこともある。このインタビューは4月と7月の間に3回メールで行った。

##### 1. **通訳として働く者と通訳になりたいと思っている者はどんな条件が必要だと思いますか。**

私は通訳者になりたいと思っている者は通訳者のための学校などで勉強するのが必要だと思います。言語をよく知るのは充分ではないと思います。なぜかといえば、学校、大学などで勉強すれば様々な技術が学べて、通訳する際に意外なシチュエーションに対して（テーマに関して関係がないコメント、ユーモア、訳せない単語、激論などのシチュエーション）、適当に応えられると思うからです。

通訳者を雇う時に求められる条件はよい発音法、グループで働ける者、愉快的な口調、また見目良い姿です。それに、カリスマ性も大切な条件だと思います。逐次通訳であれば、聴衆は通訳者だけ聞くでしょう。ですから、その場合はカリスマ性は非常に求められる条件になります。一方、同時通訳であれば、発音法は最も求められる条件です。

##### 2. **日本人のように発音、イントネーションとアクセントがあるという条件は必要だと思いますか。**

三つの条件は話者に自然さと流暢性を与えるので非常に重要だと思います。適切に発音されなければ言いたい情報はおそらく相手が全く分からないので、大切だと思います。イントネーションはスピーチにリズムを与えます。また、イントネーションによって様々なニュアンスを与えられるので、通訳者は適切なイントネーションを使わなければなりません。しかし、三つの中で問題とならないのはアクセントだと思います。

3. 通訳者の発音とイントネーションは影響を及ぼすと思いますか。

本当の現状ではもちろん影響を及ぼすと思います。なぜなら、言葉と漢字をよく知っていても自然に流暢に話せなければ、依頼者はそうした通訳者に頼ることができないからです。それに、通訳者は日本人と同じように振る舞わないで情報をできるだけ明確に伝えようとしています。

4. 最後にこれらの条件の中から一番大切な条件から並べていただけませんか。\*a~gの順番は私自身の意見です。

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| a) 日本語をよく知っている | e) 日本人のような発音       |
| b) 情報は明確に伝える   | f) 日本人のようなイントネーション |
| c) カリスマ性       | g) 日本人のようなアクセント    |
| d) 声の高さ        |                    |

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| 1. 日本語をよく知っている | 5. 日本人のような発音       |
| 2. 情報は明確に伝える   | 6. 日本人のようなイントネーション |
| 3. カリスマ性       | 7. 日本人のようなアクセント    |
| 4. 声の高さ        |                    |

実際にはガイドラインはありませんが、基本的な条件は日本語を徹底的に知っていて、情報を明確に伝えることです。しかし、依頼者は他人と話し合いたいので前述した条件と共にカリスマ性と日本の習慣がわかれば、余裕になると思います。

**コメント:** 彼女は発音、イントネーション、アクセントはある程度必要であるが、三つの中でアクセントはおそらくあまり必要ではないと思っている。また、大学、学校などで勉強することが非常に重要だと思っている。なぜかという、言葉（日本語）が話せるだけで十分でなく、養成も必要である。そうすれば、通訳している際に予期していない出来事が起こっても適切に反応できるだろうからである。

#### 4. 3 あき・いけがみ

- 北米のワシントン大学のヨーロッパ言語学部に所属し、スペイン語を勉強し、2001年に卒業した。そして、卒業してから同大学で言語教育修士を受け、2003年に卒業した。

先生の職歴は簡単に連ねるとこうなる。JX 日鉱日石金属のチリ事務所の総務部に勤務し、サンティアゴ大学の人文学部の講師として日本語翻訳科を教えていた。

先生のインタビューは5月と6月の間、メールで2回ぐらい行われた。

##### 1. 通訳として働く者と通訳になりたい者にはどんな条件が必要と思いますか。

人とのコミュニケーションを楽しいと思うこと。

思いやりを持って他人の考えや感情の察しができること。

細かいことに気がつき几帳面な正確であること。

常に調べごとをするのが苦だと思わない性格であること。

##### 2. 日本語からスペイン語への通訳者になりたいと思っている外国人は日本人のような発音、イントネーションとアクセントがあるという条件は必要だと思いますか。

完璧に日本人のような話し方をする必要はないとは思いますが、あまりに強いアクセントや不自然なイントネーションだと、聞いている人の内容の理解にも影響がでると思います。

##### 3. 通訳者の発音とイントネーションは、訳した内容の理解度に影響を及ぼすと思いますか。

はい。あまりにも外国語のようにアップダウンのある日本語を聞くと精神的に疲れて集中力が欠けることがあります。

##### 4. 最後にこれらの条件の中から一番大切な条件から並べていただけませんか。\*a~gの順番は私自身の意見です。

- |                |                    |
|----------------|--------------------|
| a) 日本語をよく知っている | e) 日本人のような発音       |
| b) 情報は明確に伝える   | f) 日本人のようなイントネーション |
| c) カリスマ性       | g) 日本人のようなアクセント    |
| d) 声の高さ        |                    |



1. 情報を明確に伝える
2. 日本語をよく知っている
3. 日本人のようなイントネーション
4. 日本人のような発音
5. 日本人のようなアクセント
6. (声の高さ)
7. (カリスマ性)

5. 4番の質問に書いてある条件以外があれば書いていただけませんか。そしてそれはなぜですか。

細かいニュアンスを正確に伝えることができる。

文化背景を理解している。

日本人の考え方を理解している。

6. 通訳の中でいろいろな形態や種類があります。日本語をスペイン語にあるいはスペイン語を日本語に訳す通訳はどれがもっとも要求されると思いますか。それはなぜですか。

(たとえば、逐次通訳と同時通訳、司法通訳、スポーツ通訳、会議通訳、医療通訳など)

医療通訳 (日本に住む日系人のサポート、スペイン・中南米に住む日本人のサポート)

司法通訳 (日系企業が中南米に進出して事業をする場合など)

7. 日本語とスペイン語を訳す通訳はあまりいないと思います。そして、少なくともチリでは日本語の通訳になりたいと思っている人々は自分で勉強するらしいです。

先生の経験から通訳になりたいと思っている人はどうやって上手になれると思いますか。

そしてどんなことを焦点にすべきだと思いますか。

語彙を増やす。

日本人と話す機会を設ける。

新聞や本を読む。

ニュースなど聞きながら常に日本語に訳す練習をする。

8. 最後に先生のいくつかの経験を書いていただけませんか。そして、その経験についてどんな形態でしたか、どんな種類でしたか、一番楽しいことと難しいことは何でしたか、そしてある通訳の前にどうやってそのテーマなどを準備しておきますかという点を考えながら書いていただけませんか。

今の仕事でよくあるのは医療通訳です。楽しいのは出産の時とかですね。元気な赤ちゃんが生まれるのを見るのは楽しいです。難しいのは流産などの時に医者の説明をしなければならぬ時など。

事務所では会議の通訳などもありますが、ぎりぎりに呼ばれることも多く準備できないことが多いです。内容についてあまり詳しくない場合は大変です。詳細に気を配って自分の理解が正しいか確かめながら通訳したりするから疲れます。それから発表の通訳の時は、短く切ってくれなかったりするから、メモとりながら訳していくので大変です。会議中に口論になった時などは、文化的背景も考慮しながら正しく、なおかつ怒らせないようにオブラートに包んで訳していくのでこれも気を使います。

**コメント:** いけがみ先生の経験からすると、通訳者は几帳面な性格を持ち、言葉だけではなく文化も分かることが必要である。また経験を考えると突然イベントが出てくることもある。例えば、会議中でけんかが始まることである。その際に、速く最もよい解決の方法を考え、臨機応変に対応しなければならないと思う。

## 5 結論

### 5.1 インタビューのまとめ

先行研究とインタビューのデータからチリでの通訳と日本での通訳の事実は違うということが分かった。まず、チリの通訳という職業はまだ発展途上にあるので、スペイン語・日本語を使って通訳できる人があまり少なく日本との関係も、特に貿易関係、今から次第に増えていきそうであるから通訳者として働ける機会もまだあまりないと思われる。しかも、今会議通訳という種類のみ時たま行われるようである。

日本における通訳を考えてみれば、司法通訳と医療通訳は最も依頼されている種類のようなものである。主に日本に住んでいる移民の数が多くなっていき、日本語が分からない外国人のニーズも多くなっていくのである。しかし、前に述べた種類は困難そうな種類であるから、その種類のための通訳になりたいと思っている人がその分野について飛び込まなければならないと言える。

通訳者に必要な条件は国によって違うようである。チリにおける通訳なら日本人のような発音、イントネーションなどあまり必要ではないということが分かった。なぜかという

と、チリで日本語で訳すことができる人があまりいないので、チリ人と日本人の間に相互理解ができれば、ある程度自分のアクセントが残っていても問題がないからである。

以上の理由でバレンチナさんとペレヨ先生の視点からすると、現在のチリで日本人のような話し方は依頼者から求められる条件ではない。これに対して、いけがみ先生の視点から日本人のようなアクセントはあまり大切ではないが、おそらく自分自身のアクセントが強すぎれば相手に影響を及ぼすかもしれない。メッセージの内容が理解できなく、精神的に疲れて集中力が欠けるからである。

よって、自分のアクセントを、相手にメッセージの内容が適切に伝えられるだけのために変えたら、自分のアクセントを守ると同時に通訳者としてもよい役割を果たせることが分かった。

## 5. 2 通訳者の望ましい条件

日本語・スペイン語のいい通訳者になるための条件は何か。私の順番はインタビューの前後で少し変わった。最初は「日本語をよく知っている」、「情報は明確に伝える」、「カリスマ性」、「声の高さ」、「日本人のような発音」、「日本人のようなイントネーション」と「日本人のようなアクセント」だった。

しかし今は、私の順番がこうなる。「日本語をよく知っている」という条件は最も大切だと思っている。なぜなら、通訳している言葉は様々なニュアンスが分からなければ、自分の言葉で他人に明確に説明できないと思うからである。次は「情報を明確に伝える」という条件である。明確に伝えることは他の言葉のニュアンス、情報、つまり、言いたいことが分かり、自分の言葉で他人に説明できるということである。例えば、ある言葉で固定表現があるが、その固定表現はそのまま自分の言葉に訳せば、同じ意味がないあるいは同じニュアンスを表さないこともある。また、話者の意思も正しく理解し、伝えることが必要である。例えば、皮肉、冗談などがよく分からなければ、失敗をする恐れがある。

インタビューの3人と違い、最も大切なのは日本語をよく知っていることである。情報を明確に伝えるのも大切だが、それをするために訳している言葉をよく知らなければならぬのである。

本来は三番目は「カリスマ性」だったが、今「文化背景を知っている」になった。話者が話す時にある程度自分自身の文化を表していて、その文化によって固定表現や言い方がある。例を挙げれば、日本人は直接、自分の意見を言わないと言われているが、チ

り人はそのように行動することがあっても、普通はそうではない。よって、通訳している時に、それを考えれば、異文化問題が起こらないと思う。

次は「パラ言語」という条件である。これは声の高さや体を使ってメッセージを伝える方法を含んでいる。例えば、講演・会議は逐次通訳で行われれば、聴衆者の集中が通訳者にあるので、適切な態度が求められている。緊張していても、声は明確でなければならない。声の高さや声で通訳者の緊張が感じられれば、彼が訳している内容が正しいかどうか聴衆者は考え始めるからである。さらに、話者は自分の話の中で、ある部分を強調すれば、通訳者もそのとおりに強調すべきだと思う。また、体や手などをよく利用すれば、通訳はもっと楽になる可能性がある。

「プレッシャーに負けず、あがらずに落ち着いて通訳出来る」（真木子、2002、p. 9）も重要な条件だと思う。インタビューと先行研究に基づいて通訳者として働けるように、プレッシャーに負けないで、冷静に通訳できることは前の条件と同じくらい大切かもしれない。今まで述べたように、通訳の職業で予想できないシチュエーションが出てくるかもしれないので、その時に適当な態度で通訳するのは当たり前である。また、人前で働ける才能も当たり前だと私は思う。前のポイントに書いたように逐次通訳で聴衆は話者より通訳者のほうを中心にするので、人前で話す能力も習得したほうが良いと思う。

「カリスマ性」はたぶん前の段落の条件と繋がっている。どのように会議の雰囲気をよくするのかはとても大切だと思う。上述したように、通訳者は聴衆が聞いている内容が通訳ではないと考えさせるのが理想的な場面だと私は思う。たぶんみんなは講義や会議を聞いている時、自分の言葉であっても、話者は雰囲気をよくしないと、徐々に内容に興味がなくなっていくが、逆に面白ければ、夢中になることもある。だから、聴衆は分からない言葉であるテーマについて聞いているので、興味がなくならないように通訳者の才能が必要である。これはたぶん依頼者の条件ではないが、私にとって、この役割を果たせばプラスになり、通訳者としてもっとよくなる気がする。これはバレンチナさんの意見に類似する。なぜかといえば、彼女が依頼者として通訳者を探した時に通訳者は人間と対応できる人でなければならないと言ったからである。

最後に「日本人のような発音」、「日本人のようなイントネーション」と「日本人のようなアクセント」という3つ条件がある。私の視点からこの3つの条件はよい通訳者になるため、必須条件ではない。だからといって、全く必要ではないとは限らないが、日本人のような発音・イントネーション・アクセントという特徴が要らないと思う。も

しネイティブスピーカーの話し方の特徴があったら、人々はある言葉に得意だと考えられるが、伝えたい情報を伝えられる限りは問題がないと私は思う。だから、いけがみ先生の意見に賛成する。例を挙げれば、自分のスペイン語のアクセントは強すぎれば相手を精神的に疲れさせるかもしれないので、少し変えれば十分である。これに対して、ペレヨ先生が言ったようにチリでの通訳という職業の現状は少し後れているので、発展しない限りに求められる条件にならないかもしれない。

まとめとして、通訳の職業は様々な能力が必要なので、この本稿ではある程度自分自身の望ましい条件に順番を与えたにもかかわらず、できる限り全部持つほうがいいと信じる。なぜかという、条件が多ければ多くほど通訳者としてよくなるからである。そして、職業の条件だけではなく、通訳者の職業の倫理も通訳者の大切な部分のため、忘れてはならない。

### 5. 3 通訳者としての私の生活

大学に入学した時に言語に興味を持っており、人と人のかげ橋になりたかったという理由で翻訳課程を勉強するのを決心した。最初に翻訳についてあまり分からなくても、徐々に翻訳の魅力を見つけた。一般的な人々が分からない言語で書いた情報を理解できるように翻訳するのはとても素晴らしいと思う。その結果、翻訳にあった興味が増加していった。だが、翻訳という職業に関して考えると、コンピューターの前でずっと翻訳していることは私の理想的な仕事ではないと思う。しかも、5年生になった頃から、私の将来に少し悩んでいる。なぜかといえば、チリでは日本語の翻訳者としての仕事は先生とすでに卒業したクラスメートによると少ないようである。

その結果、日本語の通訳者としての職業を考えた。大学で翻訳の宿題をしていた時に、書物やテストだけでかけ橋として働きたくないということを気づいた。私にとって人と人との関係を好むので、翻訳者として働くのに伴って、同時に通訳者としても働くのがよいと思う。

だが、なぜ通訳者としてもはたらきたいのであるか。私は人と人との直接の関係が大事である。また、厳密に考えれば、二つの職業は共通点を共有する。例えば、翻訳と同じように、通訳する前に扱うテーマに関して準備しなければならず、異なる文化を持っている人々のかげ橋となることができる。だから、二つの職業ができるのを信じている。

私にとって通訳という職業の魅力は3つである。まず、通訳できるように十分な勉強と準備が必要で、色々なテーマについて知ることを好む。次は通訳者になるための能力に感動する。通訳者になるための必要な条件が素晴らしいと思う。特にある言語から他言語に迅速に換えることである。最後に私にとって最も大切なのは通訳という職業を通して、人と人の相互理解を手伝うことができるので役立つ人という感じがするということである。

私の将来について考えると、最もやりたいことは翻訳者と通訳者として働くことである。しかし、その目標を達成するために、さらに勉強しないといけなく、おそらく私にとって最も難しい条件を（人前でプレッシャーに負けないこと）得ることが必須だと思う。したがって、チリに帰国し、大学を卒業してから、通訳になるためにも勉強するつもりである。そして、私の日本語のレベルが上達できるように日本で働きたいと思う。

現在この欲望が難しく見えるが、インタビューの3人の意見や経験のおかげで通訳の現実的な状況についてもう少し把握でき、やる気があれば、そして一生懸命頑張ればできないことはないと思う。

## 6. 参考文献

1. 野水真木子, 中村真佐男, 鍵村和子, 長尾ひろみ (2002). 『グローバル時代の通訳—基礎知識からトレーニング法まで—』三修社
2. 黄聖媛 (チュウエ・ジョンファ) (2011). 「通訳・翻訳者に挑戦しよう！」福岡国際大学紀要. (25), 89–100.
3. 裁判所, 平成 25 年版 『ごぞんじですか 法廷通訳—あなたも法廷通訳を—』
4. Lozano, Raúl Alfonso (2005). 「Sobre el vocalismo y la pronunciación」. *Phonica* (Vol.1), 3.
5. Laroy, Clement. (1995). 『Pronunciation』. Oxford University Press
6. Embajada de Chile en Japón. “Acuerdos y tratados bilaterales”. <http://chileabroad.gov.cl/japon/relacion-bilateral/acuerdos-y-tratados-bilaterales/>. 2013 年 5 月 17 日に取得.
7. Ministry of Foreign Affairs of Japan (外務省). “Relaciones entre Chile y Japón”. [http://www.mofa.go.jp/region/latin/chile/relation\\_s.html](http://www.mofa.go.jp/region/latin/chile/relation_s.html). 2013 年 5 月 17 日に取得.
8. Biblioteca del Congreso Nacional de Chile. “06 Abr 10 El futuro de las relaciones comerciales entre Chile y Japón, según Masaji Santo”. <http://asiapacifico.bcn.cl/noticias/relacion-comercial-chile-japon>. 2013 年 5 月 30 日に取得.
9. Diccionario de la Real Academia de la Lengua Española (RAE). <http://www.rae.es/rae.html>.
10. TrustedTranslations. “Interpretación simultánea”. <http://blog-de-traduccion.trustedtranslations.com/interpretacion-simultanea-2010-04-26.html>. 2013 年 6 月 04 日に取得.
11. Colegio Mexicano de Intérpretes de Conferencias. “Interpretación de conferencias”. <http://www.interpretesdeconferencias.mx/que-es-interpretacion-de-conferencias>. 2013 年 6 月 15 日に取得.

担当者からのコメント  
—私という人間から始まる  
研究論文—

牲川 波都季



## 担当者からのコメント

### —私という人間から始まる研究論文—

牲川 波都季

#### 1 来日から

イネス・マルケスさんとカルロス・ロドリゲスさんは、2012年9月終わりに来日し、大使館推薦<sup>すいせん</sup>の日本語・日本文化研修生として、2013年8月まで秋田大学で学びました。

推薦人数が限られている大使館推薦<sup>せんぱつ</sup>の選抜に残り、秋田で学ぶことになったお二人でしたが、出身地では日本語で会話する経験が少なく、当初は考えたことを日本語で伝えることに苦労していました。また、イネスさんとカルロスさんの日本語学習期間に差があったため、2012年2学期は個別<sup>こべつ かだい</sup>に課題研究の授業を行いました。10月・11月は毎週日記を書き、その週の秋田・日本での生活で気づいた点をまとめました。日常の出来事やそれに対する考え方から、本当に興味を持つことを見つけていき、強い動機に支えられた研究テーマへとつなげるためでした。12月からはテーマのアイディアを少しずつメモとしてまとめていきました。カルロスさんには、この間に、『論文作成デザイン—テーマの発見から研究の構築へ』(細川英雄, 2008, 東京図書)を要約しながら読破<sup>どくは</sup>するという課題も課し、なぜという問いから研究をはじめることの大切さを認識<sup>にんしき</sup>してもらいました。

#### 2 二人の論文作成の歩み

自分にとって本当に興味のあるテーマを選ぶことは、時としてとても難しいことです。マスメディアや一般的によく知られている有名なテーマに影響を受けて、自分が今いちばん考えたいこと、考える必要があることを決められない場合もよくあります。二人のテーマの変遷を見てみましょう。

## 2.1 イネス・マルケスさん

2012年12月前半	<ol style="list-style-type: none"> <li>1 ポルトガルのアジア研究者</li> <li>2 日本の生活 vs 西ヨーロッパ生活</li> <li>3 秋田大学の留学生の毎日</li> </ol>
2012年12月後半から 2013年1月から2月	ポルトガルでアジア研究者の機会
2013年4月から5月	ポルトガルのアジア研究者の機会
2013年6月から 最終レポート	ポルトガルの日本研究者の機会

表1 イネス・マルケスさんの論文テーマの変遷<sup>へんせん</sup>

イネスさんの場合、初めは三つのテーマを候補<sup>こうほ</sup>として挙げていましたが、自分にとって今一番考えたいテーマは何かと考えると、すぐ一つに絞ることができました。将来もポルトガルに住みたい、アジア（日本）研究者になりたいという二つの夢をかなえるために、イネスさんは、ポルトガルではアジア（日本）研究者にとって、どのような仕事のチャンスがありえるのかについて書くことに決めました。途中で、アジア研究者ではなく日本研究者にタイトルを変えたのは、授業の中で、カルロスさんがどちらになりたいのかを質問したのがきっかけでした。

自分が本当にめざしている将来のための論文でしたから、一度テーマを決めた後、イネスさんは非常に集中して調査を進めました。具体的には、メールなどで、出身大学のアジア研究者やリスボン大学アジア学科の学生などのインタビューを行うと同時に、在日ポルトガル大使館に連絡して、新しいインタビュー相手を見つけ出し、最終的には合計9人にインタビューを行いました。

インタビュー調査の結果、研究者にとって仕事の機会が多いとは言えないが、最近になってポルトガルでは日本との関係の重要性が認識されるようになったこと、そして自らが研究者となって、ポルトガルと日本との歴史的つながりの深さ・強さを明らかにしていくことが、その関係強化<sup>きやうか</sup>につながるという結論<sup>けつろん</sup>を導き<sup>みちび</sup>出しました。また、イネス

さんはなぜ研究者という仕事に就きたいのか、またどのようなテーマを将来構想しているのかについてまで議論を進め、まず最初の具体的な目標として、リスボン大学で日本語の会話クラブを立ち上げることを宣言しました。

## 2.2 カルロス・ロドリゲスさん

2012年12月前半	タイトルは未定（ことばを勉強するとき、アイデンティティを表す自分のアクセントまでは変えたくない。通訳者はネイティブのようにアクセントを変えたほうがいい）
2013年1月から2月	タイトルは未定（自分の夢である通訳者という仕事のために、アクセントを変える方がいいか）
2013年4月から6月前半	通訳者になるためにどのような条件が必要か
2013年6月後半から 最終レポート	スペイン語・日本語の通訳者になるためにどのような条件が必要か

表2 カルロス・ロドリゲスさんの論文テーマの変遷

カルロスさんは、テーマを考え始めたころ、日本語を習うとき、よくネイティブ・スピーカーのようなアクセントで話さなければならないと言われるが、それはおかしいという話をしていました。それで途中までは、ノンネイティブ・スピーカーが日本語を学ぶとき、どんなアクセントだとネイティブ・スピーカーと意思疎通できなくなるのかを調べることや、留学生や日本人がアクセントについてどんな考え方をもっているのかをアンケートすることなどを考えていました。

しかし、2013年1月に入り、アクセントと通訳という将来の自分の夢との関わりへと興味に移り、春休み中に問題意識を書いた際には、よいビジネス通訳者の条件を特にアクセントとの関係から考えるというテーマに改めました。そして、4月にイネスさんと合同での授業を始め、カルロスさんの問題意識について私も混じって議論したところ、カルロスさんにとってアクセントというテーマはそれほど重要ではなく、アクセントの問題は、よい通訳者にとってどのような条件が必要かという大きなテーマの一部にすぎないことがはっきりとしました。このテーマを明らかにしていくには、実際の通訳経験

者に話を聞いた方がいいだろうということになり、イネスさんと同じようにインタビューで調査を行うことに決めました。

日本語—スペイン語の通訳経験者は少なく、特に日本に住んでいて直接インタビューできるような人は見つからなかったのですが、最終的には、サンティアゴ大学での指導教員、卒業生の友人、元リスボン大学講師で通訳経験がある方の3人にメールでインタビューを行うことができました。

カルロスさんは、インタビューから、アクセントはそれほど重要ではないという自分の<sup>かせつ</sup>仮説の正しさを確認するとともに、実際の通訳者の経験を<sup>みりよく</sup>知りその仕事の魅力と大変さ、何をこれからすべきかを考え始めました。

### 2.3 「人間味」<sup>にんげんみ</sup>

日本語を使つての議論にも慣れてきたことから、2013年4月からは、イネスさん、カルロスさん、そして私の3人で一緒に、議論しながら論文作成を進めることにしました。イネスさんの方がそれまでの日本語学習期間が短く、<sup>こい</sup>語彙や話すことへの慣れの点では苦勞していましたが、そのイネスさんが、カルロスさんの問題意識について、電子辞書で探しながら述べたコメント—「人間味がない」は、その後のカルロスさんの論文作成にとって大きな方向転換になったように思います。

カルロスさんは問題意識として、通訳者にとって重要な条件は何かについての自分の仮説を書いていました。自分の仮説ではあったのですが、ただなぜそうしたテーマがカルロスさんにとって重要なのかは書かれていませんでした。カルロスさんという人だけが書ける、カルロスさんが見えてくるような論文を書いた方がいいのではないか。「人間味がない」という<sup>つうれつ</sup>痛烈にも聞こえるコメントには、オリジナリティのある論文というものについてのイネスさんの立場が詰まっており、<sup>ひひょう</sup>優れた批評のことばだったと私は思います。

## 3 研究論文とは何か

今回、イネスさんとカルロスさんは二人とも、自分の将来の仕事に関わるテーマを選んで論文化しました。こうしたテーマは非常に身近なもので、研究論文とは言えないように思えるかもしれません。しかしいかなる研究も、どこかで著者自身の思想や生活、

希望する未来と密接<sup>みっせつ</sup>につながっているからこそ、そこにオリジナリティが生まれ、他の読者に対する説得力をもちうるのではないのでしょうか。この2本の論文で使われたデータは、数としては限られたインタビュー調査の結果のみです。しかし、著者二人のオリジナリティある、明確な問題意識と結論との間に挟まれることで、このデータがなぜ必要だったのか、そこから著者たちが何を得たのかが、読者にはっきりと伝わってくるでしょう。

イネスさんとカルロスさんの論文は、きわめて個人的な問題関心から出発し、限られた質的<sup>しつてき</sup>データに基づいていながらも、ポルトガルで日本研究者になりたい人、日本語—スペイン語通訳者になりたい人に、普遍的<sup>ふへん</sup>に参考になる論文内容に仕上がりました。個からはじまる研究の大切さを示しうる例として二人の<sup>ろうさく</sup>労作を評価したいと思います。

2013年7月24日 曇天<sup>どんてん</sup>の続く秋田，研究室にて  
せがわ はづき 留学生のための課題研究 IA/IIA 担当者

平成 24 年度 日本語・日本文化研修生

指導教員 宮本律子

# 韓国語と日本語の受身の表現の 相違点について

秋田大学教育文化学部  
日本語・日本文化研修生  
任芽蘭

平成 25 年 7 月 31 日

## 目次

1. はじめに .....	3
2. 韓国語の受け身の特徴 .....	3
2-1. 당하다(tanghada) .....	3
2-2. 맞다(matta) .....	6
2-3. 입다(ipta) .....	8
2-4. 받다(patta) .....	11
3. 日本語受け身の特徴 .....	15
3-1. 「-れる・-られる」 .....	15
3-2. 「-てある」 .....	17
3-3. 直接受動文.....	21
3-4. 間接受動文.....	23
4. 日本語で翻訳するとき、現れる韓国語受け身の特徴 .....	24
4-1. 당하다(tanghada) .....	24
4-2. 맞다(matta) .....	26
4-3. 입다(ipta) .....	27
4-4. 받다(patta) .....	29
5. 韓国語で翻訳するとき、現れる日本語受け身の特徴 .....	32
5-1. 「-れる・-られる」 .....	32
5-2. 「-てある」 .....	33

5-3. 直接受動文 .....	37
5-4. 間接受動文 .....	38
<b>6. まとめ .....</b>	<b>40</b>
<b>7. 参考文献 .....</b>	<b>41</b>



## 1. はじめに

日本語と韓国語は類似又は同じ部分が多いとよく言われる。単語・発音・文法・尊敬法・謙譲語など日本と韓国が類似している点は多く見られる。類似点はよく見つけられるが、相違点を見つけることは難しいだろうと考えられる。

特に、異なっていると言える部分は「受け身」だろう。「受け身」という形成は日本ではよく使われているし、日本語教科書では必ず学習項目として取り上げられている。

しかし、韓国人にとっては、受け身を完璧に身につけるのは難しいと言われている。その理由は何だろうか。日本は昔から相手に迷惑をかけないために、相手の機嫌を取りながら、自分をへりくだりながら受け身を使ったと考えられる。韓国では、受け身の表現が昔も現在もあまり使用されないのは、直接的な表現を使って相手に自分の意見をはっきり表現したからであろう。

私は受け身の特徴、比較を通して両言語の相違点を見つけ、それぞれの特徴を明らかにしたい。

## 2. 韓国語の受け身の特徴

김청자(キム・チョンジャ 2003)は韓国の受け身の中では「당하다(tanghada), 맞다(matta), 입다(ipta), 받다(patta),)」の4種類が代表的な受け身であると述べた。

### 2-1. 당하다(tanghada)

당하다(tanghada)の辞書的な意味は「行為を表す一部の名詞の後ろに付け『被動』の意味を加え、動詞を作る接尾語。(행위를 나타내는 일부 명사 뒤에 붙어 ‘피동’의 뜻을 더하고 동사를 만드는 접미사. -국립국어연구원 표준국어대사전)」として定義されている。

송유진(ソン・ユジン 2009)によると, 당하다(tanghada)が韓国語の被動表現の中で非常に「被動」の意味を含まれているし、「被動」の性格を如実に表す。당하다(tanghada)は主語がほしくない不利な被動作用を表している。

당하다(tanghada)の被動文の特徴としては、主語は大体人物が多く、先行語も被害性が強い事件叙述名詞が多いから意味も人物が行動主によって直接的、間接的に被害を受けるのを表す。

(1) 인간은 이런 수모와 아픔을 당할 수 있다.

(人間はこんな侮辱と痛まれるかもしれない)

(Inkaneun Ireon Sumowa Apeumeul Tanghal Su Itta )

この文章では行動主が省略された形態である。行動主が省略された理由は文脈を通して把握されたり、限定され表しにくい行動主なので文章に表さないのである。

この文章の場合は인간(人間)が被動主なので수모와 아픔(侮辱と痛み)を加える行動主も「人間」を囲む「社会とその中に生きている人々」という推測もできるだろう。

(2) 그녀는 믿었던 애인에게 배반을 당하였다.

(彼女は信じた恋人から裏切られた)

(Gunyeonuen Mideoddeon Aeinege Baebaneul Tanghayeotta)

(2)は最も代表的な行動主の表示である「-에게/-한테」が使われ、この文章の行動主が人格体であることを間接的に表す。しかし、行動主の表示である「-에게/-한테」が使われた文章が必ず人格体ではない場合もある。

(3) 공산당에게 더욱 시달림을 당하였다.

(共産党からもっと苦しめられた)

(Gongsandangege Deouk Sidalimeul Tanghayeotta)

「-에게/-한테」が使われた被動文章であるが、「공산당(共産党)」という人格が集まっ

た集団はまるで人格体が行動するように「-에게/-한테」が結合され、比喩的な表現を表す。

- (4) 남편 한테서 당한 치욕을 잊을 수 없다.

(夫からされた恥辱は忘れられない)

(Nampyeonhanteseo Tanghan Chiyogeul Ijulsueopta)

この文章で起きた事件はどこから発生されたかの根源を表現するのに焦点を合わせる。

「-한테서」という接尾語を使い、事件又は状況はどこから発生したかを表す。

- (5) 진리가 우리들 사이에서 늘 침범 당하는구나.

(真理が我々の間でいつも侵犯されるのだ)

(Jinriga Urideul Saieseo Neul Chimbeum Tanghaneunguna)

行動主が場所に居住する人格体、その場所で特定な活動をする人格体であることを表す  
なので、行動主表示として「-에서」が使われた。

- (6) mbc 에 2 연패를 당하였다.

(mbc から 2 連敗をされた)

(Mbce 2yeonpaereul Tanghayeotta)

原因又は理由のような間接的な行動主を表す表示「-에」を使った文章である。

- (7) 저는 그 고통으로/으로 인해/때문에 가위눌림까지 당하던 형편이었다.

(私はその苦勞で/によって/のせいでうなされた調子だった)

(Jeoneun Geu Gotongeuro/euro inhae/taemune Gawinulimkaji Tanghadeon  
Hyeongpyeonieotta)

「-으로」を行動主の表示として使う理由は「道具」の意味を表すためである。しかし、  
単純な「道具」を使う動作より、事件を起こす原因・理由等が主に文章に表すので、こ  
ういう意味を表す「-으로」が使われた。

(8) 나는 사나운 짐승들의 습격을 당하기도 하였다.

(私は荒い獣の襲撃をされたこともあった)

(Naneun Sanaun Jimseungdeului seupgeyogeul Tanghagido Hayeotta)

「-의」が行動主の表示として使われるのは行動主と先行語を名詞句として再構成し、動詞と結合させるためである。

(9) 이를 두고 교활함이라 비판당한다면 할 말이 없다.

(これをおいて巧みさと批判されたら言葉がない)

(Ireul Dugo Gyohwalhamira Bipantanghandamyeon Hal Mali Eopta)

こういう形態は「避難・評価・認定・取扱い」等の特別な意味を持つ先行語が使われた文章である。

総合的に、당하다(tanghada)の特徴は行動主が随意的に選択される。文脈で明確に把握できたり、一般的な人の場合は省略される。

「-에게/-한테/-한테서/-에서/-에/-으로/-의」という行動主の表示を使い、各文章の意味や構造の特徴を表されている。

## 2-2. 맞다(matta)

맞다(matta)の辞書的な意味は「『動詞』どのよくないことをされる（「동사」어떤 좋지 아니한 일을 당하다. -국립국어연구원 표준국어대사전）」という意味を内包している。맞다(matta)の被動構文は四つの動詞の中で非常に先行語の範囲が限定されている構文である。「날벼락(霹靂)、된서리(ひどい霜)、몰매(打ちのめし)、소박(疎まれる)、야단(叱り)、어려움(難しさ)、죽음(死)、침략(侵略)、침입(侵入)、퇴짜(振られる)、폭격(爆撃)、핀잔(けんつく)、해금(解禁)、호통(怒声)、홈런(ホームラン)」等がこの構文で見つけられる先行語である。このような先行語の制限性のせいで「당하다(tanghada), 받다(patta),

입다(ipta)」に比べ、様々な形態が表していない。

(1-1) 내가 이렇게 수모를 당하고 야단을 맞고 있다니

(私がこんなに侮辱を受けたり、叱られるって)

(Naega Ireokke Sumoreul Tanghago Yadaneul Makko Ittani)

(1-2) 배가 연달아 폭격을 맞고 침몰하게 되었다.

(船が次々と爆撃され、沈没するようになった)

(Baega Yeondara Pokkyegeul Makko Chimmolhage Toeeotta)

(1-1)の被動主は人格体であり、(1-2)は非人格体の被動主である。맞다(matta)の被動構文は 당하다(tanghada)と同じように「被害性」の意味を現われるのに主に使用されている。この点からは被害性と人格体とは密接な関連があると考えられる。

(2) 아버지께 야단을 맞고 나면 혼자서 영영 울었다.

(親父から叱られたら一人でわあわあと泣いた)

(Abeojike Ydaneul Makko Namyeon Honjaseo Eongyeong Ureotta)

(2)は被動主が省略されたが、文脈を通して把握できる人格体の被動主である。被害性の意味で先行語も動作性を表す構文である。

(3) 본사로부터 야단을 맞다.

(本社から叱られる)

(Bonsarobuteo Yadaneul Matta)

(3-1) \*본사에 게서/한테서 야단을 맞다.

(本社から叱られる)

(Bonsaegeseo/hanteseo Yadaneul Matta)

(3)は人格体ではないが、人格体に代わりとしての直接行動主である。しかし、「本社」という非人格体と結合する場合は「-에 게서/한테서(egeseo/ hanteseo)」という行動主

の表示は結合が不可能であり、「-로부터(robuteo)」だけ可能である。

(4) 춘원은 세상에서 돌팔매를 맞고 있다.

(チュンウォンは世界からつぶてを投げられている)

(Chyunwoneun Sesangeseo Dolpalmaereul Makko Itta)

(4-1) 고2에서 퇴학을 맞고 집에서 놀고 있었다.

(高校2年に退学され、家で遊んでいた)

(Goieseon Toehageul Makko Jibeseo Nolgo Isseotta)

맞다(matta)の構文は場所で活動する人格体が行動主であることを表す類型である。なので、(4)はこの類型に相当している。しかし、(4-1)の「-에서」はその場所で活動する人に代わりにするとは考えられない。

(5) 동태는 채소장수의 호통을 맞고 생선가게 쪽으로 걸어갔다.

(ドンテは野菜さんの怒声を浴び、魚屋の方へ歩いた)

(Dongtaenuen Chaesojangsuui Hotongeul Makko Saengseongage

Jjogeuro Geoleogatta)

この「NP-이(i)NP-의(ui)NP-을 맞고(eul makko)」の構造は 맞다(matta)の構文だけで現われる構文であり、特定の構文という事実を裏付ける。

맞다(matta)は他の受身の中で先行語がごく制限的なので例文の数も少ないほうである。少ないほうであるにも関わらず、一般的な被動構文の特徴が現われていると考えられる。

### 2-3. 입다(ipta)

입다(ipta)の辞書的な意味は「(助け、損害など同意語を目的語として)受けたり、される。(((도움, 손해 따위와 같은 말을 목적어로 하여)) 받거나 당하다. -국립국어연구원 표준국어대사전)」と定義されている。

입다(ipta)は先行語が被害性を維持する場合は、당하다(tanghada)と類似であり、被害性を維持していない場合は받다(patta)と類似である。입다(ipta)は被害性を持っている状態だけ被動として表現する。また、입다(ipta)は状態を受ける受容性に焦点が合わせる。代表的な先行語は「손상(損傷), 상처(傷), 화(怒り), 영향(影響), 은혜(恩恵), 혜택(恵沢)」等がある。

(1) 엄마는 엄살이 아닌 진짜 타격을 입게 될 지도 모른다.

(母は大げさに痛がるのではなく本当に打撃を被るかもしれない)

(Eommanuen Eomsari Anin Jinjja Tagyeogeul Ipge Deol Jido Moreunda)

(1-1) 잡지사는 재정난에 화재까지 일어 드디어 일시 휴간케 되었다.

(雑誌社は財政難と火災まで発生され、とうとう一時休刊になった)

(Japjisaneun Jaejeongnane Hwajaekaji Ibeo Deudieo

Ilsi Hyuganke Toeeotta)

この文章を通して、被動主は人格対の場合が(1)のように多数であるが、(1-1)のように人格対に代わりにする集団が被動主になる際もある。この類型は당하다(tanghada)と同じように被動主が被動を受ける状態に焦点を合わせ、述べ、行動主は省略したのである。

(2) 나는 요즘 아이들에게 상처를 입고 좌절할 때가 많다.

(私は最近の子供たちに傷つけられ、挫けた時が多い)

(Naneun Yojeum Aideulege Sangcheoreul Ipgo Jwajeolhal

Taega Manta)

(2-1) 언어에 힘을 입어 새로운 세계가 시작된다.

(言語に力を受け、新しい世界が始まる)

(Eoneoe Himeul Ibeo Saeroun Segyega Sijakdoenda)

被動主が人格対によかったり、よくない状態を受ける際、この類型を使用する。この際、行動主が人格対ならこの類型として表現できるが、行動主が非人格対の場合は(2-1)のよう

に「-에(e)」を使う。

- (3) 인간관계에서도 상처를 입게 된다.

(人間関係でも傷つけられる)

(Ingangwanyeeseodo Sangcheoreul Ipge Doenda)

- (3-1) 홍수 속에서 영향을 입는다.

(洪水の中で影響を受ける)

(Hongsu Sogeseo Yeonghyangeul Ipneunda)

人格対ではない環境とか状況でも被動主が状態を受けられるので、(3)のように抽象的・具体的状況とか環境がそのまま行動主になる場合もある。この입다(ipda)は「動作の受け」ではなく、「状態の受け」なので、必ず、行動主を動作する主体として認めなくてもいいと考えられる。なので、(3-1)のように自然環境が行動主として使われる。

- (4) 작품은 그의 부드러움에 영향을 입은 것이 아니었을까.

(作品は彼の柔らかさに影響を受けたのではないだろう)

(Jakpumeun Geui Budeureoume Yeonghyangeul Ibeun

Geossi Anieosseulka)

- (4-1) 나는 이마에 상처를 입었을 때를 기억한다.

(私は額に傷をつけられたときを覚えている)

(Naneun Imae Sangcheoreul Ibeoseul Taereul Gieokhanda)

- (4-2) 겨울이나 장마철에 입은 손해를 봄, 가을에 건져야 한다.

(冬とか梅雨に被った損害を春、秋に取り戻さないといけない)

(Gyeoulina Jangmacheole Ibeun Sonhaeruel Bom, gaeule

Geonjeoya Handa)

非人格対が行動主になるため、(4)のように非人格対は原因・理由の意味として結構使用されている。(4-1)は「傷」という先行語が表す際、「傷をつける」場所が「-에(e)」と結



合する場合が多数である。また、(4-2)のように「冬とか梅雨」のように時間を表す場合もある。

(5) 질투에/에 의해서 우리들이 더 많은 상처를 입게 되었다.

(嫉妬に/によって私たちがもっと多く傷つけられた)

(Jiltue/e uihaeseo Urideuri Deo Maneun Sangcheoreul Ipge Doeotta)

입다(ipta)の構文は状態性の先行語のため、非人格体が行動主としてよく使われる。なので「- 에/에 의해서(-e/e uihaeseo)」と結合する行動主も(5)のように「嫉妬、自然現象」等が現われ、原因や理由を表す間接行動主になる。

(6) 미국 문화원 건물 화재로 피해를 입은 희생자의 가족.

(アメリカ文化院建物の火災で被害を受けた犠牲者の家族)

(Miguk Munhwawon Geonmul Hwajaero Pihaereul Ibeun

Hisangjaeui Gajok)

原因や理由を具体的に表すため、「-으로 인해/때문에(-euro inhae/taemune)」を「-으로(-euro)」として代わりにする。従い、(6)のようにこの類型に表す原因や理由は人、物事又は事件であると考えられる。

입다(ipta)の特徴として、目立つのは「動作性」先行語ではなく、「状態性」先行語が位置する。また、どのような原因や理由により、先行語の状態や文脈も相違であるのも見つけることができる。

#### 2-4. 받다(patta)

받다(patta)の辞書的な意味は「『被動』の意味を加え、動詞を作る接尾語(피동의 뜻을 더하고 동사를 만드는 접미사-국립국어연구원 표준국어대사전)」と定義されている。송유진(ソン・ユジン 2009)はこの被動構文は被害性を持っている他の受け身よりは被

害性を持っていないのでこれを被動性を持っているか疑問を提起した。

받다(patta)の先行語が被害性を表さないため、被動主が被害者としての立場より、受益者としての立場が多いと述べ、また、「受容性」の意味に意味により、「-에게서/한테서/으로부터」という行動主の表示が使われることが多い。

(1) 너희는 반쪽의 구원이나마 받게 될 것이다.

(あなたたちは半分の救援でも受けるだろう)

(Neoheeneun Banjjogeui Guwoninama Patge Doel Geosida)

(1-1) 유럽의 집단 안보 체제는 각광을 받게 된다.

(ヨーロッパの集団安保体制は脚光を浴びるようになった)

(Yureobe Jipdan Anbo Chejenuen Gakwangeul Patge Doenda)

받다(patta)の行動主は(1)のように人格体である場合もあるが、(1)よりは(1-1)のように非人格体が行動主としてよく表現される。また、받다(patta)はほかの受け身よりは助詞が「-을」だけ限定されているのではなく、先行語がどのような単語が位置するかにより、他の助詞を使用し、場合により、補助詞も使用する。

(2) 성형외과 의사에게 그녀는 수술을 받게 된다.

(形成外科の医者から彼女は手術を受けるようになる)

(Seonghyeongoegwa Uisaege Geunyeoneun Susureul Patge Doenda)

(2-1) 그 세력에게 환난을 도로 받는 것이다.

(その勢力に艱難を受けるのである)

(Gue Seryeogege Hwannaneul Doro Patneun Geosida)

この二つの文章でも人格体も非人格体も使われるが、非人格体は「-에게서(egeseo)/한테서(hantaeseo)/으로부터(eurobuteo)」という行動主の表示が使われる。

(3) 사회학은 다른 분야들로부터 별로 달갑지 않은

비판을 받게 되었다.

(社会学は他の分野から満たさない批判をされるようになった)

(Sahoehageun Dareun Bunyadeulobuteo Byeolo

Dalgapji Aneun Bipaneul Patge Doeotta)

(3-1) 사람들로부터 존경을 받게 될 것이다.

(人々から尊敬をされるのだろう)

(Saramdeulobuteo Jongyeongul Patge Doel Geosida)

(3)は「-으로부터(Eurobuteo)」は人格体及び非人格体も結合が可能である。前述した「-에게서(egeseo)/ 한테서(hantaeseo)/ 으로부터(eurobuteo)」は非人格体に使うのは制約性を含んでいるため、받다(patta)は「-으로부터(Eurobuteo)」をもっと使われる特徴があると考えられる。

(4) 온돌이 국내뿐만 아니라 해외에서도 각광을 받고 있다.

(온돌이가国内だけではなく、해외でも脚光を受けている)

(Ondori Kuknaepunman Anira Haewaeeseodo Kakwangeul Patgo Itta)

(4-1) 온돌이 국내뿐만 아니라 해외 소비자들에게 각광을 받고 있다.

(온돌이가国内だけではなく、海外消費者たちから脚光を受けている)

(Ondori Kuknaepunman Anira Haewaesobijadeurege Kakwangeul Patgo Itta)

(4)を(4-1)のように行動主「해외」を「해외 소비자들」として変えても同じ意味を表している。行動主を非人格対から人格対として表現するのを通して、表現の多様性を表そうとする話者の意図を把握できる。

(5) 경제가 외부 조건의 변화에 쉽게 영향을 받는다.

(경제가外部の条件の변화にすぐ影響を与えられる)

(Gyeongjega Webu jogeonui Byeonhwae Suipge Yeonghyangeul  
Patneunda)

(5-1) 경제가 외부 조건의 변화에 의해 / ?때문에 쉽게 영향을 받는다.

(経済が外部の条件の変化によって/?のせいですぐ影響を与えられる)

(Gyeongjega Webu jogeonui Byeonhwae euihae / ?taemune Suipge  
Yeonghyangeul Patneunda)

당하다(tanghada)の構文が被害を受け、どうして被害を受けたかの原因や理由に焦点を合わせるのに対し、받다(patta)は事件の結果、その事件の原因に焦点を合わせ、理由を明確にする意図はあまり表していない。

(6) 그는 절도 및 독직으로 유죄판결을 받게 되었다.

(彼は窃盗及び汚職で有罪判決をされた)

(Geuneun Jeoldo Mit Dokjigeuro Yujoepangyeoreul Patge Toeotta)

당하다(tanghada)の構文は「-에 e」が書かれたのは大体原因や理由を表すのに対し、받다(patta)の場合は「-에 e」が理由を表すのにはあまり使われていない。しかし、(6)のように「NP-이 NP-으로-으로 인해/때문에 NP-을 받다」の類型は行動の原因だけでなく、理由としても結構使われている。

받다(patta)の構文は당하다(tanghada)の構文と類似な部分があるが、意味や役割では相違点を持っている。당하다(tanghada)は「被害性」に焦点を合わせるため、被動主、行動主、先行語も被害性と密接に関連があるが、받다(patta)の場合は「被害性」よりは単純に誰(何)から事件を受けるという「受容性」に焦点を合わせるという相違点がある。

### 3. 日本語の受け身の特徴

日本語の受け身の特徴としては「－れる、－られる」という表現及び、「－てある」という表現を挙げられる。受け身の表現は日本語学習者が苦勞する部分である。特に、韓国語話者としては母語の中ではよく見つけられない受け身 - 韓国語の被動文 - に慣れなかったという理由として、「－れる、－られる、－てある」の部分で苦勞を感じる。

日本語の受け身の特徴として何があるか。4種類の部分として分けられる。

1. 「－れる、－られる」
2. 「－てある」
3. 直接受動文
4. 間接受動文

この4種類の部分が日本語の受け身として伝わっている。では、この4種類の特徴は何があるのだろうか。

#### 3-1. 「－れる、－られる」

加藤・吉田（2004）は日本語の「－れる・られる」は

- ① 可能    ② 受身    ③ 尊敬    ④ 自発

の用法がある。しかし、④の場合は「－であると考えられる」のように判断を含む動詞で使うことが多いから使えるケースはあまりない。

この「－れる、－られる」の受身形の作り方は以下の通りである。名古屋大学日本語研究会 GA6（2006）によると、

I 類動詞 (U-verb) : 語幹に-areru を付ける。

盗む nusum-+ -areru

聞く kik-+ -areru

II 類動詞 (RU-verb) : 語幹に-rareru を付ける。

見る mi-+ -rareru

食べる tabe-+-rareru

III 類動詞 (不規則動詞) : 「する」は「される」に、「来る」は「来られる」になる。(pp53-54)

この規則として例を挙げられる。

(1) ジョンソンが、イチローを打ち取った。

(1-1) イチローが、ジョンソンに打ち取られた。

(1) と (1-1) は同じ出来事を表現している。が、話題の中心が異なっており、ジョンソンか、イチローかに話題の中心が相違している。能動文である (1) を受身として変換させたのが (1-1)、すなわち、受身文 (受動文) である。この 2 種類の文章は能動や受動として変換でき、文章の意味も同じであるが、次の文章は受身として受けられない。

(2) 国会が新しい法律を制定した。

(2-1) 新しい法律が国会によって制定された。

この場合は影響の受けてである「新しい法律」は与え手である「国会」により、実は何ら影響を受けていない。影響を受けるも何も、その動作が行われる際には存在せず、その動作により、初めて成り立ち、存在するものなので、影響の受けようとならないのである。

それについて、前述した (1) の「打ち取る」という動作により影響を受けた「イチロー」と、影響を与えた「ジョンソン」との関係とは異なっている。受身文には、このように動作主が、動作の受け手に影響を与えないタイプのものがある。このような文のことを無影響の受身と呼ぶ。

(3) 太郎は、妻に叩かれた。

(3-1) 妻が、太郎を叩いた。

(4) 子供が、犬に噛まれた。

(4-1) 犬が、子供を噛んだ。

(3) と (4) の受身文はそれぞれ (3-1)、(4-1) と対応している。能動文と「-れる・-られる」の受身文は次のような関係である。

(能動文)	Xが	(は)	Yを	Vする。
	\		/	
	/		\	
(受身文)	Yが	(は)	Xに	Vされる。

このような関係で能動文が受身文として変換される。しかし、全ての能動文が受身文として変換されるわけではない。能動文の主語の動作性や影響を受けているかどうかという場合により受身文として役割を果たす。

### 3-2. 「-てある」

「-てある」は基本的に、ある目的のための動作の結果としてある状態がのこっていることを表す。

(8) ドアが開けてある。

(9) テーブルにきれいなバラが活けてある。

状態を表すという点では、シテイル刑と同じであるが、シテイル刑が表す状態が進行中や動作の結果など様々な場合があるのに対し、「してある」が表す状態は動作の結果に限られる。また、動詞は、基本的に意志動詞でなければならない。

他動詞が述語になる文では、元々のヲ格名詞は、ガ格になる場合とヲ格のままの場合とが

ある。

(10a) ドアを開ける。

(10b) ドアが開けてある。

(10c) ドアを開けてある。

「てある」の主な用法は、(10a)のような、結果の残存を表す用法と、(10b)のような、効力の残存を表す用法二つである。

#### ① 結果の残存

結果の残存とは、対象への働きかけによって生じた結果が対象の状態として残存していることを表す用法である。基本的に他動詞から作られ、元々のヲ格名詞はガ格になる。存在の意味が残っているので、場所を表すニ格名詞と共起することもある。

(11) その部屋は、換気のために、窓が開けてあった。

(12) 久しぶりにあの店に行ってみると、臨時休業の紙が  
貼ってあった。

(13) 佐藤の部屋に行くと、机の上に彼女の写真が飾ってあった。

#### ② 効力の残存

効力の残存とは、対象の変化は生じないが、ある目的のためにあらかじめ行った行為の効力が何らかの形で残存することを表す用法である。

(14) その件については、もう調べてある。

(15) この問題の解決策は、ちゃんと考えてある。



(16) 試合に備えて、十分寝てある。

また 홍성희 (ホン・ソンヒェ 2007) 「てある」が位置変化の結果、対象変化の結果、動作の完了、準備、省略があると述べた。

### ③ 位置変化の結果

空間的存在様式を表す動詞—代表動詞を形態、場所、様態、関係、状況、目的として規定した意味を表す動詞—に「てある」が付くと、結果としての存在の状態を表す。たとえば、形態面として規定されている動詞は「掛ける、立てる、つみあげる、つみかさねる、つりさげる、つむ」等があり、場所面は「いれる、しまう、のせる」等があり、様態面は「そろえる、ならべる、まとめる、ひろげる」等、関係面は「くくりつける、つなぎとめる、つなぐ、とめる、はりつける、むすびつける、付ける、とりつける、はる、むすぶ、ゆわえる」等、状況面は「ためる、のこす」であり、目的面は「ほぞんする、しかける、すてる」等がある。

(17) ただし、意志の「よう」と否定的意志の「まい」は命令法に入れてある。(『言語学入門：190』)

(18) この部屋には彼と上司の部長の机が置いてある。乱雑に書類が広げてある部長の机に比べて、赴任直後の同級生の机は何もなくてきれいだった。まだ荷物もほどいていないらしい。「この病院、どうよ？結構忙しいでしょ？」。部長のいすの背もたれを抱くような形で座りながら話のきっかけと、しゃべり出す。(『朝日新聞』06. 10. 30)

(19) —合格—という文字を書いて勉強机の上に貼った。それから、合格と書いてあるもの、たとえば魔法瓶などに”合格”というシールが貼ってあると、それをはがして、いつも眼にする場所に貼ったりした。(『だから』：187)

(17) は場所、(18) は様態、(19) は関係から規定されている動詞である。

#### ④ 対象変化の結果

対象を変化させるのを表す動詞から作られる。「押してある」、「書いてある」、「加えてある」、「干してある」、「蒸してある」等の表現がある。

- (20) トラブルに遭わないためには、花火に書いてある遊び方や警告、注意書きをよく読み、衣服に火がつかないように注意する。花火の持ち手の位置にも注意し、途中で火が消えても筒の中をのぞいたりほぐしたりはしない。

(『朝日新聞』06. 08. 03)

#### ⑤ 動作の完了

この動作の完了は自動詞だけではなく、他動詞でもつける表現である。ただの「動作の完了」だけの意味を表すのは少なく、準備の「～てある」の意味と似ているところが多い。準備の意味を強く表すために「ちゃんと」、「ように」のような句が付く場合が多い。「決めてある」、「示してある」、「解説してある」、「紹介してある」等がある。

#### ⑥ 準備

対象変化の結果の状態から派生されたのは準備的動作と一緒に結果の状態も強く表しており、動作の完了から派生されたのは準備的動作の意味になるのが多い。

準備的意味が強く表すためには語彙その自体が準備的意味を持っている場合や句文的条件として目的を表す「～ように」の句がある場合である。最後は「ちゃんと」、「～考えて」等の文脈による場合がある。

- (21) 「ところで、馬にくらをつけて置くようにたのんでおいたが、  
準備はできているか」 「はい、入り口の前に準備してあります」

(『三銃士』：120)

- (22) …相手が振り飛車で来て相振り飛車になっても、対策はちゃんと考えて  
あります。(『日経新聞』06. 09. 16)

(23) 片岡 時間の使い方はうまい。大事なところにちゃんと時間が取って  
ある。

⑦ 省略

前述した分類の中に該当されていないところもある。

(24) 社会に出れば、誰も苦手なタイプの人間と対峙することが往々してあるもの  
だ。（「朝日新聞」06. 08. 31）

3-3. 直接受動文

また、加藤・吉田（2004）は受身の中では「直接受動文」と「間接受動文」があるとい  
い、直接受動文は英語などの受動文と同じであり、能動文の目的語と主語を入れ替えるこ  
とであると述べた。間接受動文は日本語の受動文で、能動文の主語と目的語を入れ替える  
やり方よらない受動文であり、[被害受身]と説明されることもある。

(25) 私は、彼に手紙を読まれた。（間接受動文）

(26) 私の手紙は、彼に読まれた。（直接受動文）

(25) では、[彼に手紙を読まれたくなかったのに] という意味合いが感じ取れ、「私」  
は「彼に手紙を読まれる」という被害や迷惑なことを破ったという解釈が成立する。(26)  
は客観的に述べている感じがある。

加藤（2006）によると、普通の自動詞能動文の場合は、ヲ格標示（第一斜格）の名詞項  
が存在しないので、これを昇格させることはできない。昇格がなければ、「対で昇格と降格  
を生じる」という直接受動文の定義を充足しないので、自動的に間接受動文のみが受動文  
として生成されることになる。しかし、場所格などのヲ格は「道を歩く」「交差点を進む」

「故郷を離れる」など、自動詞と見られるものでも、第一斜格の名詞項が存在することはありうる。その一部は、昇格を許し、降格と対になって生じるので、直接受動文が可能である。従って、一般に言われている「自動詞は間接受動文しかつukれない」とするテーゼは、厳格に評価すると正しくないことになる。(p. 11)

(27) 次郎がねむる。

(27-1) 次郎にねむられる。

(27-2) 花子が次郎にねむられる。

(27-1) のように視点者がいないと、この出来事の受けてとなる受影者が明確ではない。が、(27-2) のように視点者となる名詞項を加えることになる。この場合は、花子が視点者であり、この出来事が花子に対して生じたと解釈され、出来事の受け手、そして、影響を被るものとして受影者は花子となるといえるだろう。このように視点者となるガ格標示の名詞句を加える処理を視点者追加である。間接受動文は、視点者追加が必要であると考えられる。

(28) 葉子がバスに乗る。

(28-1) 葉子にバスに乗られる。

(28-2) 太郎が、葉子にバスに乗られる。

(28) を受動文にした (28-1) では降格のみが見られる。主語「葉子が」が「葉子に」として変わったのが降格したと確認できる。(28-1) は無視点の間接受動文であり、視点者がいないと意味的な不足を感じられるし、(28-2) は視点者追加の処置をしたのである。この場合は「バスに」の格標示は残留したままであり、「太郎」が視点者であり受影者であることは明らかであるが、これだけではどういう影響を被ったのかが明確ではない。

視点者追加とその条件は次の通りである。

→視点者追加：間接受動文で、不足する非斜格名詞項を視点者として追加する操作を「視点者追加」という。

→視点者追加の適切性条件：視点者追加が適切に成立するには、受影度が文脈や推論あるいは世界知識によって理解可能であること、視点者を追加する動機に妥当性があることが必要である。

### 3-4. 間接受動文

また、加藤重広（2006）は単他動詞と呼ぶのは「XがYを…する」のように、必須格の名詞項を2つしかとらない他動詞であると説明した。

(29) 花子がパソコンを買う。

(29-1) 花子にパソコンが買われる。{降格+昇格}

(29-2) 花子にパソコンを買われる。

(29-3) 太郎が、花子にパソコンを買われる。

他動詞能動文である(29)を受動化した際、(29-1)は直接受動文であり、(29-2)は間接受動文である。この間接受動文は支店者追加をとり、(29-3)は「太郎」を支店とする文になり、この文の形は「先に」「勝手に」「無断で」などの表現を伴う場合が多いし、文脈をあつらえる必要があり、受影度が明確になれば受容度も高くなる傾向を持っている。この文章では太郎お受影度は被害や迷惑として認識されることになる。

直接受動文と間接受動文では、間接受動文のほうがやや自然に感じられるが、直接受動文も構造的には適格である。

非情物を主語とする他動詞文の場合も、同じように成立することがある。次の(30)は(30-1)の直接受動文、(30-2)の間接受動文のようになる。降格した「に」は「によって」でもいいが、直接受動文の場合だけ、原因と解して「で」で置き換えることもかろうであるが、間接受動文では「で」に置き換えできない。

(30) 太郎の機転がその子を救った。

(30-1) 太郎の機転にその子が救われる。{降格+昇格}

(30-2) 太郎の機転にその子を救われる。{降格}

(30-3) 太郎の機転でその子が救われる。

(30-4) \*太郎の機転でその子を救われる。

#### 4. 日本語で翻訳するとき、現れる韓国語受け身の特徴

以上、韓国語や日本語の受け身の特徴を叙述した。それでは、第一章で述べた韓国語の受け身を日本語で翻訳したら、どんな特徴を持っているのだろうか。

##### 4-1. 당하다(tanghada)

(1) 인간은 이런 수모와 아픔을 당할 수 있다.

→人間はこんな侮辱と痛まれるかもしれない。

(Inkaneun Ireon Sumowa Apeumeul Tanghal Su Itta )

(2) 그녀는 믿었던 애인에게 배반을 당하였다.

→彼女は信じた恋人から裏切られた。

(Gunyeonuen Mideoddeon Aeinege Baebaneul Tanghayeotta)

(3) 공산당에게 더욱 시달림을 당하였다.

→共産党からもっと苦しめられた。

(Gongsandangege Deouk Sidalimeul Tanghayeotta)

(4) 남편 한테서 당한 치욕을 잊을 수 없다.

→夫からされた恥辱は忘れられない。

(Nampyeonhanteseo Tanghan Chiyogeul Ijulsueopta)

(5) 진리가 우리들 사이에서 늘 침범 당하는구나.

→眞理が我々の間でいつも侵犯されるのだ。

(Jinriga Urideul Saieseo Neul Chimbeum Tanghaneunguna)

(6) mbc 에 2 연패를 당하였다.

→mbc から2連敗をされた。

(Mbce 2yeonpaereul Tanghayeotta)

(7) 저는 그 고통으로/으로 인해/때문에 가위놀림까지 당하던 형편이었다.

→私はその苦勞で/によって/のせいでうなされた調子だった。

(Jeoneun Geu Gotongeuro/euro inhae/taemune Gawinulimkaji Tanghadeon  
Hyeongpyeonieotta)

(8) 나는 사나운 짐승들의 습격을 당하기도 하였다.

→私は荒い獣の襲撃をされたこともあった。

(Naneun Sanaun Jimseungdeului seupgeyogeul Tanghagido Hayeotta)

(9) 이를 두고 교활함이라 비판당한다면 할 말이 없다.

→これをおいて巧みさと批判されたら言葉がない。

(Ireul Dugo Gyohwalhamira Bipantanghandamyeon Hal Mali Eopta)

당하다の文の翻訳を通し、당하다に該当する日本語は辞書では「される」と定義されているが、(1) - (3) は「される」と表現せず、動詞の受動化になり、「-れる・られる」の形になるのを発見できる。

「-에게/-한테」は「-から」として翻訳されるのをわかるし、(6) の「-에」は「-に」

として翻訳されず、「一から」として翻訳され、당하다の意味を表せる。

4-2. 맞다(matta)

(1-1) 내가 이렇게 수모를 당하고 야단을 맞고 있다니

→私がこんなに侮辱を受けたり、叱られるって

(Naega Ireokke Sumoreul Tanghago Yadaneul Makko Ittani)

(1-2) 배가 연달아 폭격을 맞고 침몰하게 되었다.

→船が次々と爆撃され、沈没するようになった。

(Baega Yeondara Pokkyegeul Makko Chimmolhage Toeotta)

(2) 아버지께 야단을 맞고 나면 혼자서 엉엉 울었다.

→親父から叱られたら一人でわあわあと泣いた。

(Abeojike Ydaneul Makko Namyon Honjaseo Eongyeong Ureotta)

(3) 본사로부터 야단을 맞다.

→本社から叱られる。

(Bonsarobuteo Yadaneul Matta)

(3-1) \*본사에 게서/한테서 야단을 맞다.

→本社から叱られる。

(Bonsaegeseo/hanteseo Yadaneul Matta)

(4) 춘원은 세상에서 돌팔매를 맞고 있다.

→チュンウォンは世界からつぶてを投げられている。

(Chyunwoneun Sesangeseo Dolpalmaereul Makko Itta)



(4-1) 고 2 에서 퇴학을 맞고 집에서 놀고 있었다.

→高校 2 年に退学され、家で遊んでいた。

(Goieseo Toehageul Makko Jibeseo Nolgo Isseotta)

(5) 동태는 채소장수의 호통을 맞고 생선가게 쪽으로 걸어갔다.

→ドンテは野菜さんの怒声を浴び、魚屋の方へ歩いた。

(Dongtaenuen Chaesojangsuui Hotongeul Makko Saengseongage

Jjogeuro Geoleogatta)

맞다의辞書的な意味は受け身の意味の「される」も含まれるが、「殴る」「打つ」の意味が強い傾向がある。なので、(1-1)、(2)、(3)は「叱られる」という表現を使った。しかし、(3-1)の場合は翻訳では(3)と同じであるが、「-에 게서/한테서 (egeseo/ hanteseo)」の表現は人格対だけの行動主の表示が可能である。(4)と(4-1)の「- 에서(eseo)」は相違がある表現として翻訳された。(4)の場合は行動主が「世界」という場所なので「-で」として翻訳されたが、(4-1)は「高校 2 年」という時期を表す行動種なので「-に」として翻訳される。

#### 4-3. 입다(ipta)

(1) 엄마는 엄살이 아닌 진짜 타격을 입게 될 지도 모른다.

(母は大げさに痛がるのではなく本当に打撃を被るかもしれない)

(Eommanuen Eomsari Anin Jinjja Tagyeogeul Ipge Deol Jido Moreunda)

(1-1) 잡지사는 재정난에 화재까지 일어 드디어 일시 휴간케 되었다.

(雑誌社は財政難と火災まで発生され、とうとう一時休刊になった)

(Japjisaneun Jaejeongnane Hwajaekaji Ibeo Deudieo Ilsi Hyuganke)

Toeeotta)

(2) 나는 요즘 아이들에게 상처를 입고 좌절할 때가 많다.

(私は最近の子供たちに傷つけられ、挫けた時が多い)

(Naneun Yojeum Aideulege Sangcheoreul Ipgo Jwajeolhal Taega Manta)

(2-1) 언어에 힘을 입어 새로운 세계가 시작된다.

(言語に力を受け、新しい世界が始まる)

(Eoneoe Himeul Ibeo Saeroun Segyega Si jakdoenda)

(3) 인간관계에서도 상처를 입게 된다.

(人間関係でも傷つけられる)

(Ingagwangyeeseodo Sangcheoreul Ipge Doenda)

(3-1) 홍수 속에서 영향을 입는다.

(洪水の中で影響を受ける)

(Hongsu Sogeseo Yeonghyangeul Ipneunda)

(4) 작품은 그의 부드러움에 영향을 입은 것이 아니었을까.

(作品は彼の柔らかさに影響を受けたのではないだろう)

(Jakpumeun Geui Budeureoume Yeonghyangeul Ibeun

Geossi Anieosseulka)

(4-1) 나는 이마에 상처를 입었을 때를 기억한다.

(私は額に傷をつけられたときを覚えている)

(Naneun Imae Sangcheoreul Ibeoseul Taereul Gieokhanda)

(4-2) 겨울이나 장마철에 입은 손해를 봄, 가을에 건져야 한다.

(冬とか梅雨に被った損害を春、秋に取り戻さないといけない)

(Gyeoulina Jangmacheole Ibeun Sonhaeruel Bom, gaeule  
Geonjeoya Handa)

(5) 질투에/에 의해서 우리들이 더 많은 상처를 입게 되었다.

(嫉妬に/によって私たちがもっと多く傷つけられた)

(Jiltue/e uihaeseo Urideuri Deo Maneun Sangcheoreul Ipge Doeotta)

(6) 미국 문화원 건물 화재로 피해를 입은 희생자의 가족.

(アメリカ文化院建物の火災で被害を受けた犠牲者の家族)

(Miguk Munhwawon Geonmul Hwajaero Pihaereul Ibeun  
Hisangjaeui Gajok)

입다(ipta)의 辞書的な意味は主に「被る」「負う」「受ける」として被害や傷などをされたという意味が含まれている。(2-1)、(4)以外の全ての文章は火災・傷・梅雨・洪水などの被害名詞が位置し、その名詞に応じる動詞—受ける、される、傷つけられる、被る—が使用されている。(2-1)、(4)は原因・理由・きっかけとして使われ、입다가必ず被害だけを表す受け身ではないのがこの翻訳でわかる。

#### 4-4. 받다(patta)

(1) 너희는 반쪽의 구원이나마 받게 될 것이다.

(あなたたちは半分の救援でも受けるだろう)

(Neoheeneun Banjjogeui Guwoninama Patge Doel Geosida)

(1-1) 유럽의 집단 안보 체제는 각광을 받게 된다.

(ヨーロッパ의 集團安保体制は脚光を浴びるようになった)

(Yureobe Jipdan Anbo Chejenuen Gakwangeul Patge Doenda)

(2) 성형외과 의사에게 그녀는 수술을 받게 된다.

(形成外科の医者から彼女は手術を受けるようになる)

(Seonghyeongoegwa Uisaege Geunyeoneun Susureul Patge Doenda)

(2-1) 그 세력에게 환난을 도로 받는 것이다.

(その勢力に艱難を受けるのである)

(Gue Seryeogege Hwannaneul Doro Patneun Geosida)

(3) 사회학은 다른 분야들로부터 별로 달갑지 않은

비판을 받게 되었다.

(社会学は他の分野から満たさない批判をされるようになった)

(Sahoehageun Dareun Bunyadeulobuteo Byeolo

Dalgapji Aneun Bipaneul Patge Doeotta)

(3-1) 사람들로부터 존경을 받게 될 것이다.

(人々から尊敬をされるのだろう)

(Saramdeulobuteo Jongyeonggeul Patge Doel Geosida)

(4) 온들이 국내뿐만 아니라 해외에서도 각광을 받고 있다.

(オンドルが国内だけではなく、海外でも脚光を受けている)

(Ondori Kuknaepunman Anira Haewaeseodo Kakwangeul Patgo Itta)

(4-1) 온들이 국내뿐만 아니라 해외 소비자들에게 각광을 받고 있다.

(オンドルが国内だけではなく、海外消費者たちから脚光を受けてい

る)

(Ondori Kuknaepunman Anira Haewaesobijadeurege Kakwangeul Patgo Itta)

(5) **경제가** 외부 조건의 **변화에** 쉽게 **영향을 받는다.**

(經濟が外部の条件の変化にすぐ影響を与えられる)

(Gyeongjega Webu jogeonui Byeonhwaee Suipge Yeonghyangeul Patneunda)

(5-1) **경제가** 외부 조건의 **변화에 의해/ ?때문에** 쉽게 **영향을 받는다.**

(經濟が外部の条件の変化によって/?のせいですぐ影響を与えられる)

(Gyeongjega Webu jogeonui Byeonhwaee euihae/ ?taemune Suipge Yeonghyangeul Patneunda)

(6) **그는 절도 및 독적으로 유죄판결을 받게** 되었다.

(彼は窃盗及び汚職で有罪判決をされた)

(Geuneun Jeoldo Mit Dokjigeuro Yujoepangyeoreul Patge Toeotta)

받다의辭書的な意味は「受ける」が代表的である。従って、この받다の文章の(1), (2), (2-1), (4), (4-1)が「受ける」として翻訳されている。

받다는被害性ももちろん、受容性にも焦点が合わせられているため、「－에게서/한테서/으로부터 (egeseo/ hanteseo/eurobuteo)」の表現が使い、前に位置するのは人格対も、非人格対も相応できる。

받다の翻訳として「受ける」と「与える」として翻訳されたものもある。

5. 韓国語で翻訳するとき、現れる日本語受け身の特徴

以上、韓国語の受け身を日本語で翻訳する場合、表す特徴を叙述した。次、日本語の受け身の特徴である。

5-1. 「-れる・-られる」

(1) ジョンソンが、イチローを打ち取った。

존슨이 이치로를 받아들였다.

(Johnsoni Ichiroruel Padadeuryeotta)

(1-1) イチローが、ジョンソンに打ち取られた。

이치로가 존슨에게 발탁되었다.

(Ichiroga Johnstonege Baltaktoeotta)

(2) 国会が新しい法律を制定した。

국회가 새로운 법률을 제정했다.

(Kukkuega Saeroun Beobryureul Jejeonghaetta)

(2-1) 新しい法律が国会によって制定された。

새로운 법률이 국회에 의해 제정되었다.

(Saeroun Beobryuri Kukkuee Uihage JejeongToeeotta)

(3) 太郎は、妻に叩かれた。

타로는 아내에게 맞았다.

(Taronuen Anaeege Majatta)

(3-1) 妻が、太郎を叩いた。

아내가 타로를 때렸다.

(Anaega Taruruel Taeryeotta)

(4) 子供が、犬に噛まれた。

아이가 개에게 물렸다.

(Aiga Gaege Mulyeotta)

(4-1) 犬が、子供を噛んだ。

개가 아이를 물었다.

(Gaega Aireul Mureotta)

以上の翻訳で、韓国語の受け身の特徴として述べた맞다가(3)に現われている。(1)と(1-1)は「受け取る」と同じ単語が受け身の「受け取られる」が、全く異なる単語、「받아들여지다(padadeuryeojida)」ではなく、「발탁되었다(抜擢された)」として翻訳した。「받아들여지다(padadeuryeojida)」としても翻訳できるが、受け身を日本よりあまり使われていない韓国語の特徴なので、「발탁되었다(抜擢された)」という意味は同じ単語を選択し、翻訳した。(3)と(3-1)も「맞았다(majatta)」、「때렸다(taeryeotta)」と主語の状態により、動詞の相違があるのがわかった。

## 5-2. 「-である」

(11) その部屋は、換気のために、窓が開けてあった。

그 방은 환기시키기 위해 창문이 열려 있었다.

(Geu Bangeun Hwangisikigi Uihae Changmuni Yeolyeo Isseotta)

(12) 久しぶりにあの店に行ってみると、臨時休業の紙が

貼ってあった。

오랜만에 그 가게에 가 보니, 임시휴업이라는 종이가  
붙어 있었다.

(Oraenmane Geu Gagee Ga Boni, Imsihyueobiraneun Jongiga Buchyeo  
Issetta)

(13) 佐藤の部屋に行くと、机の上に彼女の写真が飾ってあった。

사토의 방에 가니깐 책상 위에 여자친구 사진이 꾸며져 있었다.

(Satoui Bange Ganikan Chaeksang Uie Yeojachingu Sajini Kumyeojeo  
Isseotta)

(14) その件については、もう調べてある。

그 조건에 대해서는 좀 더 조사 해 두겠다.

(Geu Jogeone Daehaeseonuen Jom Deo Josa Hae Dugetta)

(15) この問題の解決策は、ちゃんと考えてある。

이 문제의 해결책은 천천히 생각해 두겠다.

(I Munjeui Haegyeolchaegeun Cheonchoeni Saenggake Dugetta)

(16) 試合に備えて、十分寝てある。

시합을 대비해서, 충분히 자 두겠다.

(Sihabul Daebihaeseo Chungbuni Ja Dugetta)

(17) …命令法に入れてある。 (『言語学入門：190』)

…명령법에 소속되어 있다.

(…Myeongryeongbeobe Sosoktoeoo Itta)



(18) …乱雑に書類が広げてある部長の机に比べて、赴任直後の同級生の机は何もなくてきれいだった。…

(「朝日新聞」06. 10. 30)

…난잡하게 서류가 펼쳐져 있는 부장의 책상과는 달리, 부임직후의 동급생의 책상은 아무것도 없이 깨끗했다. …

(…Nanjapage Seoryuga Pyeolcheojeo Itnun Bujangui  
Chaeksangwaneun Dali, Buimjikhuui Donggupsaengei  
Chaeksangeun Amugeotdo Eopsi Kaekeutaetta)

(19)…たとえば魔法瓶などに”合格”というシールが貼ってあると、それをはがして、いつも眼にする場所に貼ったりした。

(『だから』 : 187)

… 예를 들면 마법의 병 등에 “합격”이라는 실이 붙여 있으면, 그것을 떼서 항상 눈에 보이는 장소에 붙이거나 했다.

(…Yereul Deulmyeon Mabeobui Byeong Deunge “Habgyeok” iranuen  
Seali Butcheoisseumyeon, Geugeoseul Teseo Hangsang nune  
Boineun Jangsoe Buchigeona haetta)

(20)トラブルに遭わないためには、花火に書いてある遊び方や警告、注意書きをよく読み、衣服に火がつかないように注意する。…

(『朝日新聞』06. 08. 03)

트러블이 발생하지 않기 위해서는, 불꽃 폭죽에 써 있는 즐기는 방법과 경고, 주의를 잘 읽고, 옷에 불이 붙지 않도록 주의한다.

(Teureoburi Balsaenghaji Anki Uihaeseoneun, Bulkot Pokjuge Sseo Itneun  
Jeulgineun Bangbeobgwa Gyeonggo, Juireul Jal Ilko, Ose Buri Butji Antorok  
Juihanda)

- (21) 「ところで、馬にくらをつけて置くようにたのんでおいたが、  
準備はできているか」 「はい、入り口の前に準備してあります」  
(『三銃士』 : 120)  
“그런데 말에게 곳간에 있도록 부탁해 두었지만, 준비는 되었는가”  
(Geureonde Malege Goggane Ittorok Butakae Dueojjiman, Junbineun  
Toeeotneunga)  
“네, 입구 앞에 준비 되어 있습니다.”  
(Ne, Ipgu Ape Junbi Toeeo Itseupnida)
- (22) …対策はちゃんと考えてあります。(「日経新聞」06. 09. 16)  
…대책을 잘 생각해 두겠습니다.  
(…Daechaegeul Jal Saenggakae Dugessupnida)
- (23) …大事なところにちゃんと時間が取ってある。  
…중요한 곳에 제대로 시간을 내 두다.  
(…Jungyohan Gose Jedaero Siganeul Nae Duda)
- (24) 社会に出れば、誰も苦手なタイプの人間と対峙することが往々してあるもの  
だ。(「朝日新聞」06. 08. 31)  
사회에 나가면, 누구라도 대하기 힘든 유형의 사람과 대립하는  
것을 자주 해야한다.  
(Sahoe Nagamyeon, Nugurado Daehagi Himdeun Yuhyeongui Saramgwa  
Daeriphabeun geoseul Jaju Haeyahanda)

「ーてある」の場合様々な翻訳になるのが特徴であろう。(14) から (16) は効力

の残存としての表現や (22)、(23) の準備としての表現であるので、「～して置く」と同じ意味の「～해 두다」<sup>1)</sup>として翻訳するようになった。が、(24) の場合、省略として例外なところなので、能動態として翻訳した。受け身として翻訳したら「～해 두다」<sup>2)</sup>「社会に出れば」の句と文脈が違うため、能動態として翻訳するようになった。大体の文章では「～해 있다, ～되어 있다」のように解釈され、「～てある」の意味を持っている。

### 5-3. 直接受動文

(27) 次郎がねむる。

지로가 잠든다.

(Jiroga Jamdeunda)

(27-1) 次郎にねむられる。

지로에 의해 잠이 들었다.

(Jiroe Uihae Jami Deureotta)

(27-2) 花子が次郎にねむられる。

하나코가 지로에 의해 잠이 들었다.

(Hanakoga Jiroe Uihae Jami Deureotta)

(28) 葉子がバスに乗る。

요코가 버스에 타다.

(Yokoga Buseue Tada)

(28-1) 葉子にバスに乗られる。

요코에 의해 버스를 타게 되다.

(Yokoe Uihae Buseureul Tage Toeda)

(28-2) 太郎が、葉子にバスに乗られる。

타로가 요코에 의해 버스를 타게 되다.

(Taroga Yokoe Uihae Buseureul Tage Toeda)

直接受動文の場合、視点者の有無が文章のどんな部分に焦点が合わせているのかを明確にわかることができる。翻訳した結果、大きな相違点は見つけられなかった。ただ、視点者があると、翻訳したのもどの部分に焦点が合っているのかが明らかになる。

#### 5-4. 間接受動文

(29) 花子がパソコンを買う。

하나코가 컴퓨터를 사다.

(Hanakoga Keompyuteoreul Sada)

(29-2) 花子にパソコンを買われる。

하나코에게 컴퓨터를 사게 되었다.

(Hanakoege Keompyuteoreul Sage Toeeotta)

(29-3) 太郎が、花子にパソコンを買われる。

타로가 하나코에게 컴퓨터를 사게 되었다.

(Taroga Hanakoege Keompyuteoreul Sage Toeeotta)

(30) 太郎の機転がその子を救った。

타로의 기지로 그 아이를 구조했다.

(Tarooui Gijiro Geu Aireul Gujohaetta)

(30-2) 太郎の機転にその子を救われる。{降格}

\* 타로의 기지로 그 아이를 구조 되었다.

(Taroui Gijiro Geu Aireul Gujo Toeotta)

(30-3) 太郎の機転でその子が救われる。

타로의 기지로 그 아이가 구조 되었다.

(Taroui Gijiro Geu Aiga Gujo Toeotta)

(30-4) \*太郎の機転でその子を救われる。

\*타로의 기지로 그 아이를 구조 되었다.

(Taroui Gijiro Geu Airuel Gujo Toeotta)

この関節受動文では降格した「に」は「によって」がよく使われている。翻訳し、見つかれた結果は(30-2)は日本語の文章としてはおかしいところが見つけられたのである。(30-2)以外の文章は自然な文として翻訳ができた。

## 6. まとめ

以上、韓国語や日本語の受け身の特徴、そして、両言語で翻訳してみた。韓国語の受け身は整形化された単語—당하다, 맞다, 입다, 받다—として存在しており、使われている状況や文法的な部分としても日本語より限定があるのが見つけられた。

日本語の受け身は「—れる・—られる」、「—てある」、直接受動文、間接受動文という4種類の代表的な形があり、「—れる・—られる」は日本語の受け身として基本であるが、「—てある」は受け身の中で様々な機能—結果の残存、効力の残存、位置変化の結果、対象変化の結果、動作の完了、準備、省略—を表した。直接受動文は視点者の有無により、受容度や文脈の相違がある。間接受動文は直接受動文との間と降格、昇格などにより、文章の意味や構造が違い、主語の後ろの助詞も「～に、～によって」などに限定する。

翻訳した場合、どちらの言語にも受身として表現される場合もあったが、そうではない場合もあった。これについては将来の研究として両言語の受け身の相違点についてもっと研究したい。

7. 参考文献

加藤重広 (2006) 「日本語受動構文の構造的意味と推意に関する語用論的原理の記述的研」

北海道大学

加藤重広、吉田朋彦 (2004) 『日本語を知るための 51 題』 株式会社 研究社

김청자 (キム・チョンジヤ) (2003) 「국어 피동 타동사 구문 연구」 아주대학교

(Ajou University)

송유진 (ソン・ユジン) (2009) 「피동 표현 '되다, 받다, 당하다' 의 피동성 연구」

한양대학교(hanyang University)

名古屋大学日本語研究会 GA 6 (2006) 『ふしぎ発見！日本語文法』 三弥井書店

日本語記述文法研究会 (2006) 『現代日本語文法』 くろしお出版

홍성혜 (ホン・ソンヒェ) (2007) 「현대일본어의 「てある」 의 의미 분석」 영남대학교

益岡陸志、野田尚史、森山卓郎 (2006) 『日本語文法の新地平 1』 くろしお出版

# 日本人の「内」と「外」意識

— 家屋構造と言語表現から —

秋田大学教育文化学部

日本語・日本文化研修生

張子洋



# 要旨

外国語を勉強するとき、その国の社会文化も理解すべきである。なぜかという、言語と文化は互いに依存し、互いに影響するからである。文化をよく理解したら、言語の勉強にも役に立てる。「内」と「外」意識は日本社会文化に重要な役割を演じている。日本人とうまく交流するために欠かせない意識でもある。よって、本文は日本家屋の構造、言語表現を分析し、日本人の「内」と「外」の意識を簡単に検討する。それで日本を深く理解し、日本語をよくマスターできると考えられる。

キーワード: 内外意識 社会文化 言語 日本家屋 敬語 謝罪言葉 授受動詞 集団主義

# 目次

日本人の「内」と「外」意識.....	1
1. 初めに.....	1
2. 「内」と「外」の意味論.....	1
3. 日本の家屋の構造における「内」と「外」意識.....	2
3. 1 敷居と玄関.....	2
3. 2 台所と便所.....	3
4. 言語表現における「内」と「外」意識.....	4
4. 1 敬語から見る「内」と「外」意識.....	4
4. 2 謝罪表現から見る「内」と「外」意識.....	6
4. 3 授受表現から見る「内」と「外」意識.....	8
5. 「内」と「外」意識の文化背景.....	12
5. 1 地理環境と歴史的要因.....	12
5. 2 日本人の集団主義と「内」と「外」意識.....	13
6. 終わりに.....	15
参考文献.....	17

## 日本人の「内」と「外」意識

### —家屋構造と言語表現から—

#### 1. 初めに

言語は特定の社会に生まれ、その社会の文化を映し出す鏡である。言語と文化は互いに依存し、互いに影響を与えている。したがって、外国語を勉強するとき、その国の文化や社会習慣を理解すれば、よりよくその文化を身につけるのではないだろうか。

日本人はよく礼儀正しい民族だといわれている。他人と付き合うとき、同じ意味を表しても、違う人に対して、違う言葉の表現を選択する。それは日本人が人間関係をはっきりと区別する「内」と「外」意識を持っているからである。柳田国男（1958）は、「日本人には特殊な内と外との観念が発達している。（中略）これは日本人が、こういう国に生まれ合わせたがために思わず知らず養った特徴である。」（p.3）と述べている。「内」と「外」意識は日本社会の代表的な文化特徴の一つだといえる。それをよく把握できれば、日本語の勉強には役にたつに違いない。

よって、筆者は日本の家屋の構造、日本人の集団主義、敬語表現及び謝罪言葉、授受表現から出発し、地理環境や歴史要素を加えて日本人の「内」と「外」意識を分析して、研究してみよう。

#### 2. 「内」と「外」の意味論

はじめに、「内」と「外」の意味を取り上げようと思う。『新明解国語辞典』によると、「内」の意味は「自分の仲間（属する組織・団体など）」である。『社会学事典』によれば、「内」と「外」とは、「日本文化において、自我を中心とした内集団と外集団への態度の対比をとらえる通用語」ということである。一言にいうと、「内」は「家族、自分

の集団内部の人、自分の属するグループなど」を指し、「外」とは「親しくない人、他社の人、他グループの人」なのである。しかし、この「内」と「外」の間の境界線は永久に変わらないわけではない。時間、立場の変化によって、話し手と聞き手との心理的な距離によって変わることもある。

### 3. 日本の家屋の構造における「内」と「外」意識

日本人の「内」と「外」意識は生活の隅々までも浸透している、ここでは、奥野(1984)をもとに、日本の伝統的な家屋の構造から「内」と「外」意識を分析する。

#### 3. 1 敷居と玄関

日本の家屋の部屋は、内と外の間、厳然たる敷居がある。敷居から中は内であり、外とは画然と区別されている。敷居の中には容易には外の人間を入れさせない。外の人間はたとえ4畳半の部屋であっても簡単に入り込むことはできない。敷居があれば、部屋に入る前に、靴や履物を脱がなければならないわけである。外履きの履物を脱いで、初めて家に、内に入れるということが、日本人の内と外を厳然とわけているのである。狭い玄関で履物を脱ぎ、一步高い畳の空間に踏み入れる。そのわずか十センチか、二十センチの敷居が、外部の人間の侵入を防いでいるのである。奥野健男(1984)はパリにいたとき、郵便配達夫と商品運搬人に土足のままで家に入られたことがあった。そして、「自分のうちが侵されたという恐怖を感じた。わずか高さ二十センチの敷居がなく、畳がないため外が内にたやすく侵入してくるのだ」と述べている(pp.267-275)。

その敷居の意味をもっと大きく広げれば、「玄関」という概念が出てくる。「玄関」は「内」と「外」を分ける重要な空間である。部屋に入るとき、必ず玄関で靴を脱いでから、「内」に入ることは、日本人の常識である。内の人には常に玄関で接客する。客に「お入りください」というのは、一般的には、玄関で靴を脱いでもらい、部屋に導くための

表現であろう。もしその客はよその人だったら、例えば、奥野が会った郵便配達夫のことであれば、うちの人は「お入りください」とは言わない。そのまま、玄関で用件について話をするのである。いうまでもなく、日本において、靴を脱ぐという行為は家屋の「外」から家屋の「内」へ移動する際の、ひとつの象徴であるといえる。この「内」と「外」との区別は、靴の着脱にのみあらわれているわけではない。一般に、「内」では、「外」での服装とは異なり、くつろいだ格好をする。「内」弁慶などのような態度も、「内」と「外」とでは異なる。ただし、玄関で靴の着脱は非常に明瞭である。こういうとき、玄関がきわめて重要な役割を果たすことがわかる。玄関は、戸ではなく、「内」と「外」を結ぶ空間である。いわゆる、「玄関」は同時に「内」でもあり「外」でもある、両義的な境界領域である。

### 3. 2 台所と便所

日本の家屋の中に、玄関のごとき両義的意味を持っている場所は台所と便所である。大部分の家庭の台所が土間から板床に変わった、つい最近までは、板張りである家屋のほかの部分より低い平面になる。家屋の「内」にあっても、台所は明らかに他から区別された空間である。日本の便所には専用の履物がある。サンダルやスリッパなどであって、「外」に出かけるときに着用する履物とは異なるし、「内」の履物とも違う。便所にはいかにもそれらしい履物があるのである。日本旅館の共同便所で使用されている木のつっかけがその典型的な例であろう。便所に入るとき靴を変えなければならない。こういう方面から見ると、便所という所は「内」と「外」の接点と言えないまでも、玄関同様、「内」と「外」との両義的な性格を持つ領域とは言えるのだろう。

「内」と「外」の意識が日本人の家屋の構造にはよく反映されるのは、日本人にその意識が根強いからであろう。その家屋の構造から、「内」と「外」意識は日本人の日常生活の中に非常に重要な役割を果たしていることがわかる。「外」の人は簡単に日本人の部

屋の中に入ることはできないように、日本人の心に接触することも難しいことが明らかにする。「内」と「外」の意識が強ければこそ、日本人は「外」の人に対して、非常に丁寧な表現を使っているのである。敬語はその表現の一つである。

## 4. 言語表現における「内」と「外」意識

この部分で敬語と謝罪言葉二つの表現から「内」と「外」意識を分析する。

### 4. 1 敬語から見る「内」と「外」意識

日本人の「内」と「外」意識を反映する表現の中には、敬語は異議なく一番代表的な表現に決まっている。よって、ここで敬語と内・外意識のかかわりを分析しようと思う。

敬語とは、話してと聞き手、および話題の人物との間の様々な関係に基づいてことばを使い分け、その人間関係を明らかにする表現形式ということである。「敬語の指針」(2007)では敬語を以下のように説明する。

「敬語は、古代から現代にいたる日本語の歴史の中で、一貫して重要な役割を担い続けている。その役割とは、人が言葉を用いて自らの意思や感情を人に伝える際に、単にその内容を表現するのではなく、相手や周囲の人と、自らとの人間関係・社会的関係についての気持ちの在り方を表現するというものである。」(p.5)

昔の人間は科学も知識も乏しかったので、理解できない自然現象がたくさんあった、分からなかったからこそ、その自然現象には非常に敬畏したのである。災難を避けるために、できるだけ美しい言葉を使って、神様に尊敬を表すようになった。その言葉から敬語はだんだん形成してきた。敬語の起源から見ると、日本人は熟知ではないものに敬意を生じることがわかった。それ故に、敬語は尊敬の気持ちだけでなく、相手と距離を置く気持ちも持っている。

例1：道を聞くとき、知り合いと知らず人によって、使われる表現は違う。

i. ねね、郵貯銀行はどこ。

ii. すみませんが、郵貯銀行はどこでしょうか。

i の聞き手は「内」の友達であり、ii の聞き手は「外」の知らない人である。

例2 : i. 自分の会社の上司と話したとき。

部長、この企画にお目通しいただきたいのですが。

ii. 会社で客と話すとき

A : 山田部長にお目にかかりたいのですが。

B : 申し訳ございませんが、山田は只今席を外しております。

i のように、自分の上司に対して、必ず尊敬語を使うが、ii のように、「外」の客と話す際に「内」の会社の上司に言及する場合は、呼び捨てにし、謙譲語を使って低めることが求められる。

例1の場合に、「内」の人に対して、敬語を使う意識はあまりない。しかし、「外」の人に対して、敬意を表すために、敬語を使わなければいけない。例2の場合に、敬語を使っているが、「内」と「外」の違いによって、尊敬語と謙譲語の使用も違う。「内」の人に対して謙譲語が使われ、外人に対しては尊敬語がつかわれる。「外」の人間から見れば、自分も上司も同じ会社の一員であることに変わりませんから、自分と上司との関係は無視して、自分と一体の「身内」として扱うことが、礼儀にかなっているのである。こういう時の敬語は「相対敬語」と言われる。ここでもう一つのケースを挙げる。

例3. 友達の家で電話したらお母さんが出たという場面である。

A : もしもし、あの、佐藤と申しますが、達也君いらっしゃいますか。

B : ちょっと待ってくださいね。

達也君は友達なので、二人で直接話すときは「君」などつけず敬語も使わないのであるが、お母さんの前では、達也君は自分の友達である以前に、相手の「身内」であるということを考慮して表現を選ぶことが、聞き手に対する礼儀となる。

このように、対話の中に二人だけでなく、話題人物も出てくる場合、敬語を使うとき、「話して（自分）」と「話題の人物」の関係以外に、「聞き手（相手）」を含めた三者の関係を考慮する必要がある。そういう考えによると、「話題の人物」に対する心の距離が生じるかもしれないので、その人が「内」か「外」かの扱い方も変化するかもしれない。どちらかという、その変化は相手に対しての尊敬を表すためである。

日本人の尊敬の意識は相手を尊敬してためるというよりも、むしろ相手を敬遠して扱うということを基本にしている。敬語から見ると日本人の「内」と「外」意識は明らかになる。

#### 4. 2 謝罪表現から見る「内」と「外」意識

日本人は謝るとき、相手の人間関係によって、使う謝罪言葉も違う。2013年5月、筆者は秋田県秋田大学の101人の大学生を対象に、謝罪言葉の使い方についてのアンケート調査を行った。この調査の中では、筆者は4つの場面（相手の足を踏んだ時、相手のものを壊したとき、相手を騙したとき、相手を傷つけるとき）を設定し、若者たちはそれぞれの場面で「内」（グラフ1）と「外」（グラフ2）の人に対して使う謝罪言葉の違いを考察して、内外意識と謝罪言葉の関連性を研究した。

本調査では、謝罪する対象を知らない人、目上の人、親友、両親、恋人の5種類に設定した。それに、話し手と関係なく知らない人と尊敬すべき目上の人を「外」の範囲に入れて、話し手と関係がもっと親しい親友、両親、恋人を「内」の範囲に入れた。いうまでもなく、ほかの人間との親疎関係の判断は主観的なものであり、社会的に固定したものではないので、人によって、例として出される人を異なる分野に分ける可能性もあるかもしれない、たとえば、先生を「内」の人と見なすかどうかという点である。本論ではただ一般的な認識から出発し、「内」と「外」の関係を統一に決めた。それで、調査結果は次の図表のようにまとめられる。（注：外と内の使い次回数比較は「外/内」

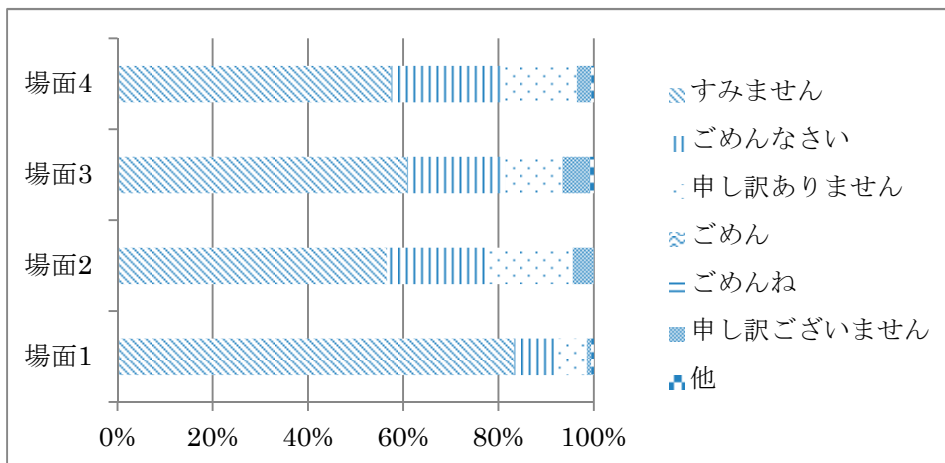


の形で示す。)

	場面1	場面2	場面3	場面4
すみません	170/4	115/9	121/12	114/9
ごめんなさい	17/43	43/99	41/95	47/106
申し訳ありません	14/0	36/0	24/0	30/0
ごめん	0/225	0/160	0/193	0/166
ごめんね	0/15	0/11	0/13	0/21
申し訳ございません	2/0	9/0	11/0	6/0
ほか	0/12	0/11	0/5	0/3

表 調査結果

上の表をグラフにすると、比較しやすい。

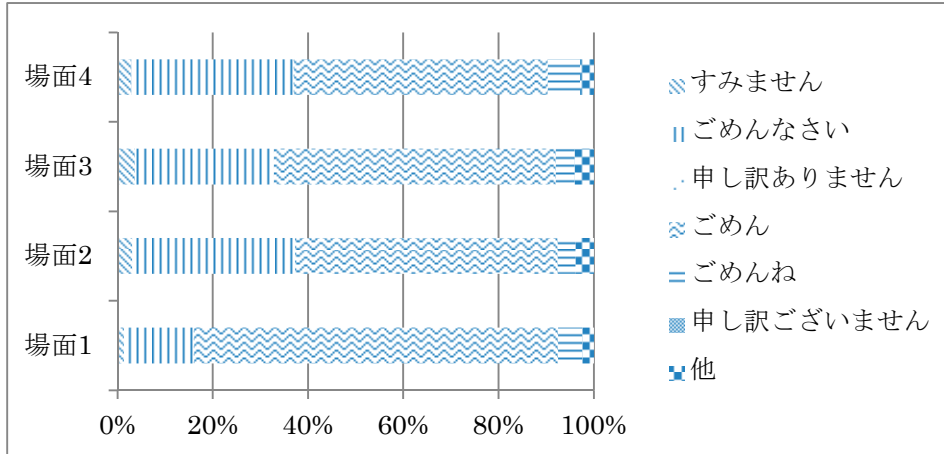


グラフ1 「外」の人に謝る場合

「外」の人に謝るとき、どんな場面でも「すみません」の割合が圧倒的に多い。次には「ごめんなさい」である。「申し訳ありません」は少しだけ「ごめんなさい」を下回るが、大体相同の比率に使われる。場合によって、「申し訳ございません」も時々使われる。「ごめん」と「ごめんね」は全然使われないことが示される。

「内」の人に謝るとき、どんな場面でも「ごめん」の割合が一番多く使われる。次にも「ごめんなさい」である。「ごめんね」と「すみません」は両方とも少なく使われるが、「ごめんね」の方は「すみません」より、多く使われる。「申し訳ありません」と「申し訳ございません」は全く使われないことが明示される。

この二つのラフから見ると、日本人の「内」と「外」意識は謝罪言葉の使用状況に反映されることがわかる。「内」の人に対してよく使う謝罪言葉は「ごめん」、「ごめんね」などであり、「外」の人に使うのは「すみません」、「申し訳ありません」、「申し



グラフ2 「内」の人に謝る場合

訳ございません」などである。「ごめんなさい」はどちらでも使えるが、「内」の方にさらに頻繁に使われる。

佐藤（2011）は、テレビドラマのシナリオを調査してから、『ごめん』と『ごめんなさい』は内の相手に対して多く使用されている。ただし、『ごめんなさい』は外の件数も比較的多い。『すみません』は外が多く、『申し訳ありません』はほとんど外の相手に対して使用されている。」と結論づけている。

まとめると、謝罪言葉からも日本人の「内」と「外」意識が明らかになる。

#### 4. 3 授受表現から見る「内」と「外」意識

日本語の中には、授受動詞と内外意識とは緊密の関係がある。視点の違いによって相手に対しての扱いも違う。その相手との関係なりの授受動詞を使わなければならない。したがって、この部分で、授受動詞と内外意識の関係を検討しようと思う。

授受動詞は、話者と与える側、話者と受ける側との間の関係や授受するものへの話者の評価を明らかにするために、表現が多様である。図1の通り、「やる、あげる、さし

あげる、もらう、いただく、ちょうだいする、くれる、くださる、たまわる」九つも分けられる。そして、補助動詞をついたら、また「てやる、てあげる、てさしあげる、てもらう、ていただく、てくれる、てくださる」というような複合動詞になる。ここでは、よく使われる「やる、あげる、もらう、さしあげる、いただく、くれる、くださる」の七つの授受動詞だけを簡単に説明する。

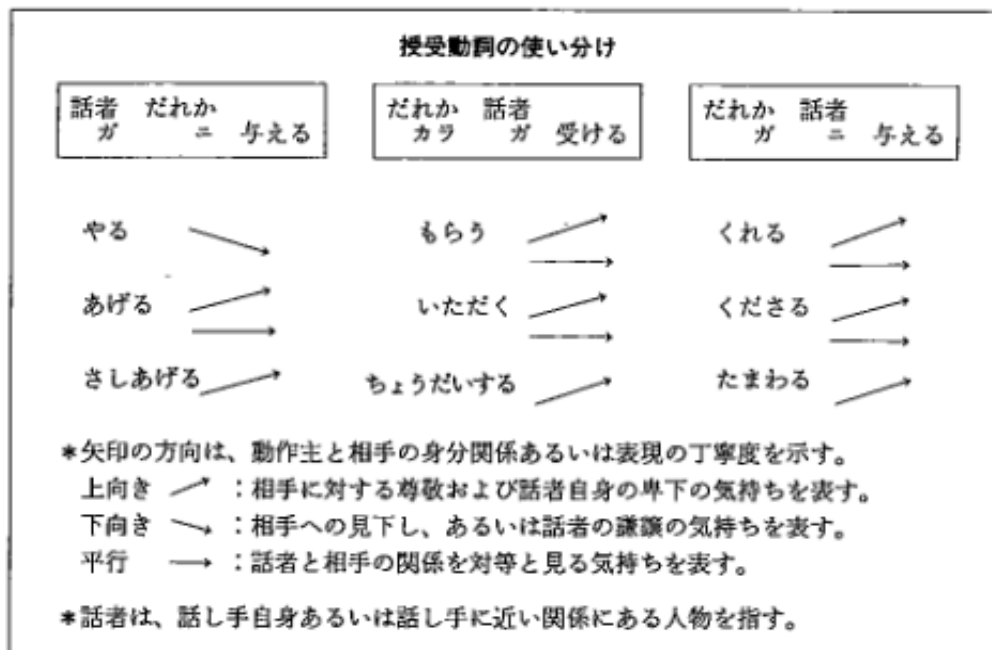


図1 出典：岩岡（1993） p.71

この七つの授受動詞を大まかに分類すると。「やる、くれる、あげる」は「授」のカテゴリーに入れ、対応する丁寧体は「くださる、さしあげる」である。「もらう」は「受」のカテゴリーに入れ、丁寧体は「いただく」である。方向性から見ると、寺村（1982）は「内」と「外」の関係を図2のように矢印で指摘した。話し手を中心とした動きの方向性を見れば、「やる」と「あげる」は内側から外側へ移る（例1と例2）。「くれる」と「もらう」は外側から内側へ移る（例3と例4）。すなわち、「やる」、「あげる」は「行く」と、「くれる」、「もらう」は「来る」と共通しているといえる。一方、「くれる」と「もらう」の物の移動の方向は同じであるが、「が」格をとるものが違う。「くれる」の「が」

格はeのように恩恵を与える方の後に付いて、「もらう」の「が」格は(g)のように受ける方の後に付くものである。

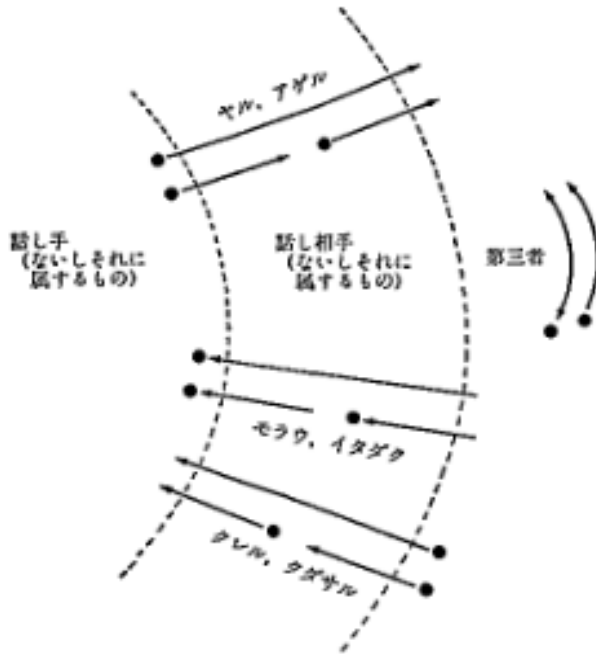


図2 出典：寺村（1982） p.134

それから、各授受動詞の各々の違いを次の例文を参考して分析しようと思う。

- 例1： a. 子供は子犬に菓子をやった。  
 b. お母さんは子供に 500 円をやった。

「やる」は目下の者や動植物に対して使う。ものや恩恵の方向は内側から外側へ移る。

- 例2： c. 母に私の編んだ手袋をあげた。  
 d. 私は先生に本をさしあげた。

「あげる」と「さしあげる」は恩恵の移動する方向が同じように内側から外側へ行くのであるが、受ける人との関係によって、使い方がまた違う。(e)のように、内側の母にもものを与えるときは、「あげる」を使えば十分である。(f)のように、相手が先生るとき、また「差し上げる」を使ったほうが先生を尊敬する程度が高い。

- 例3： e. 友達がくれた腕時計はきれいだ。

f. 先生が私に辞書をくださった。

方向性からみると、「くれる」も「くださる」も外側の人に与えられるが、与える方との関係によって、使い方はまた違う。(e)のように与える方が友達の場合に、つまり内側の人とき、「くれる」を使う。(f)のように与える方が先生の場合に、先生は内側に対して目上であり、よそ者であるので、外側という存在といえる。こういう時、先生に対しての尊敬を表すために、「くださる」を使う必要がある。

例4 : g. 私が妹に本をもらった。

h. 私が先生に辞書をいただいた。

「もらう」と「いただく」も外側から内側に移動するが、(g)のように内側の妹に与えられるとき「もらう」を使って、(h)のように外側の先生に恩恵を受けるとき「いただく」を使う。

ほかの人のことを述べる時、内側と外側の関係によって、選ばれる表現も違う。(例5)

例5 : i. 洋子は太郎にジュースをあげた。

j. 洋子は太郎にジュースをくれた。

(i)と(j)の内容は同じであるが、話し手と太郎の心理関係によって、違いが起きる。(i)の場合に、太郎は話し手にとって「外」の人であるので、「あげる」を使うわけである。(j)の場合に、太郎は話し手の「内」の人である。「内」の人だと、狭い意味で家族であるが、共感を覚える相手も「内」の範囲に入れられる。そのため「くれる」を使うわけである。これも、日本人のユニークな心理の一つの表現であろう。

つまり、人間関係から見ると、内側の人に対して、「もらう」「あげる」「くれる」「やる」などを使う場合が多い、外側の人に対して、「くださる」「いただく」「差し上げる」などを使う頻度が高いである。そして、第三人が出てくるとき、内側の人だったら、「くれる」を使い、外側の人だったら、「あげる」だけで述べるということである。

ここで、提起しなければならないのは「から」と「に」の使い方である。「もらう」構文では、恩恵を与える方を助詞の「に」でも「から」でも表せる。その違いも人間関係とかかわっている。以下の例6を読んでみよう。

例6. k. 私は彼氏「に/から」指輪をもらった。

1. 私は大学「に/から」奨学金をもらった。

話し手は与える方を内側の人だと感じていれば「に」を、そうでなければ「から」を使うということである。kでは、与える方が恋人だから、「に」を使うべきである。「から」を使ったら、二人の関係が危ういのではないかと疑うかもしれない。なぜなら、「から」はその伝えられるものに着目するからである。話し手が伝えたいのは彼氏の愛情であるはずである、「から」を使ったら、あまりよくない意味が勘ぐる可能性がある。1では、奨学金を与えるのは学校という組織であるから、たとえ大学を愛するといえども、「に」が使えない。つまり、「に」は内の心理と、「から」は外の心理と、それぞれ結びついているのである。

以上の例のどおり、授受動詞を使用するとき、「内」と「外」意識は重要な役割を演じることがわかる。

## 5. 「内」と「外」意識の文化背景

「内」と「外」意識の文化背景とは、その意識が生まれた原因と集団主義の働きという二つの部分に分けられる。それに、背景には地理環境の影響と歴史的要因が含まれている。

### 5. 1 地理環境と歴史的要因

「内」と「外」意識の源は遥かに昔から連綿と続いてきた。周知のように、日本は大陸とつながっていない島国である。周りは海に囲まれている。昔、科学と交通は不便であるので、日本は長い間で孤立され、外部との連絡は少ない。いわば閉鎖的な国である。

こういう特徴は日本が大陸文化を吸収する間接性と自身文化を形成する後発性を決める。それで、全体日本にとって、「外」の世界は未知なものである。日本の「内」から見ると、日本列島は細長くて、国土は一つの全体ではない、島と島の間は距離があるので、たくさんの互いに連絡しない群れや集落が出てきた。これは、内外意識が生まれた地理的な原因である。また、江戸時代は徳川300諸侯と呼ばれ、日本全国は数多くの藩に分けられた。各藩は自分の政治、経済、軍事などの権力がある以上に、政府の制限による、互いには交流しなかった。これは内外意識が生まれた歴史的な原因である。

日本は単一民族であるから、メリットがある。単一民族、単一言語のおかげで、人々は群れになりやすい。ただ、地理環境の限定で、その群れは自然的に形成してくる集合体である。すなわち自然村である。また、日本は昔から、農耕国である。弥正時代から稲作を始めた。科学技術が発達していなかった古代では、人々は自然に対抗力もほぼなかったもので、同じ村のみんなは共同に努力し、共同に収穫した。人々は自分の村のルールを守らなければならない、一旦違うことをやったら、「村八分」という制裁を裁かれるわけである。その状態でだんだん協力集団が作られた、集団の中の人々は一つの共同体であるし、集団のことを大切にしている。集団のうちには、絶対団結の状態だといえる、集団の利益は自分の利益を代表するという意識が根強く存在する。それにひきかえ、集団の外のことに対して、ある程度の排斥の心理が多少持っている。そういうような意識は今まで続き、だんだん豊富になり、今日の「内」と「外」の意識になってきた。しかも、日本社会を貫いて非常に重要な役割を果たしている。

## 5. 2 日本人の集団主義と「内」と「外」意識

日本人の「内」と「外」意識は、日本の民族性的な集団主義にも反映される。集団主義といえば、一番印象的な定義は「一人はみんなのために、みんなは一人のために」ということである。日本の集団主義が、その理念に属するが、全く同じものであるともい

えない。川本（1982）も「日本人の伝統的、集团的性格に対する自己卑下が生まれ、それをさらに反映して国際的にも日本人は集団主義的であるという評価が定着した。しかし、日本人の集团的性格はそんなに非難され、自己卑下すべきものではない。」と述べている（p.12）。日本の集団意識は、ただの表現だけではない、日本人の民族性も表現する。日本人は民族性として、集団から離れては生きていくことはできないという本能的な理解や感覚が世界のほかの国より、もっとよく持っているという。

昔から日本人は集団主義を尊敬し、国と民族の精神核心にした。日本社会において、自分が属している集団の利益のために、だれでも自発的に懸命に働いて、いかなるときも集団の利益を先に考える、自分を犠牲にしても集団のために力を尽くす。集団では、異を唱えたりするものには、ほかのメンバーに排斥されるかもしれない。これは、「内」と「外」という意識が強いという表現である。人々は「内」から離れると、うまくいかないと思っているし、周りの人々は、だれでもこの「内」の規則を守らなければならないと意識している。「旅の恥はかき捨てて」という言葉は、「外」の社会に入ったときの日本人の意識を表す。「内」と表現と一変し、周りに対して勝手な行動が許されると思う傾向がある。それ故に、「内」では絶対しないことが「外」では平気で行うことがよくある。

川本（1982）は、『日本人と集団主義』の中に、「昭和三六年秋、アメリカの社会学者リースマンが来日し、約二ヵ月滞在した。彼は滞日中、懸命に明治以降の日本近代化がなぜにかくも早く成功し、さらに太平洋戦争の敗戦というどん底からなぜにかくも早く立ち直ったか、この秘密を探ろうとした。（中略）学者たちはいずれも日本の集団主義的文化を言い、日本においては個人主義が未成熟であって個人は集団に埋没していると説く。」ということ述べた（pp.16-17）。それから見ると、集団主義の長所がわかる。集団主義があるからこそ、日本人は非常に団結し、同じの目標を目指して頑張る。一人の力が弱いですが、たくさんの人の力を合わせたら、すさまじい力になる。そのため、



日本の経済も国力も進展している。したがって、集団意識は日本人にとって、極めて重要な精神的宝物だといえるだろう。

日本人の集団意識はある程度では「内」の意識とイコールできると思われる。集団の「内」に対する態度と「外」に対する態度が全く違うので、集団主義が「内」「外」意識との関係は切れない。

## 6. 終わりに

「内」と「外」意識は昔から日本の舞台で極めて重要な役を演じてきた。いわば、日本文化の一つの体現である。その意識は日本の生活習慣、言語文化など様々な方面に存在している。日本語の学習者の外国人にとっては、日本文化をよりよく理解するために、勉強しなければならない常識である。

本文は日本の家屋の構造、敬語と謝罪言葉と授受動詞の表現から「内」と「外」の意識を簡単に検討した上に、文化背景から「内」「外」意識が形成した原因と集団主義の働きを考察した。まず、日本家屋の敷居の存在は「内」と「外」の意識を反映する。そして、相手との関係によって、話し方も違う敬語は、「内」と「外」意識をよく表している。次に、謝罪言葉から見ると、「内」の人に対して、「ごめん」「ごめんね」はよく使われ、「外」の人にたして、「すみません」はよく使われる。最後は、授受動詞から見ると、「くれる」と「もらう」は外側から内側の人が恩恵を受けるときよく使う。「あげる」は内側から外側の人に恩恵を与えるとき使う言葉である。しかも、目上の人を外側と見なすとき、「いただく」「くださる」「さしあげる」という尊敬言葉を使うべきである。

日本人の「内」と「外」意識は本文の中に提出した方面以外に、さまざまところでも反映される。たとえば、人を称賛することである。日本の学者高崎文雄（1998）

は「ウチは称賛しないのが原則で、ソトに属する人は称賛の対象になる」と指摘した。したがって、日本人は他人の前に、「内」の人をめったにほめない。それに引き替え、「外」の人特に外国人と話すとき、よく彼らを称賛する、たとえその外国人が簡単な日本語しか話せなくても、日本人も「日本語が上手ですね」、「すごいですね」というふう褒める。

「内」と「外」の意識には、日本人の民族性が含まれる。非常に長い時間を通して、今まで伝えてきたので、中身は著しく豊富であるにほかならない。本文はせいぜい氷山の一角だけであるので、「内」と「外」意識の研究はまだ山ほどあるはずである。よって、今後は他の方面から日本人の「内」と「外」意識を続けて研究して、内外意識とほかの日本の社会文化の関係を比べて日本文化を一層勉強したいと思う。

## 参考文献

1. 岩岡登代子(1993).『日本人のための日本語 例文・問題シリーズ3 動詞』  
(p.71) 荒竹出版
2. 奥野健男(1980).「文学における"間"の構造-5-日本人の内と外の関係」『す  
ばる』(pp267-275) 集英社
3. 川本彰(1982).『日本人と集団主義—土地と血』(p.12 pp.16-17) 玉川大  
学出版部
4. 菊地康人(1994).『敬語』角川書店
5. 熊井茂行(1989)『日本人はなぜ玄関で靴をぬぐのか: 日本文化における  
「うち」と「そと」』『明治学院論叢』第441号 総合科学研究(33) 明  
治学院大学一般教育部学会
6. 蔵雁飛(2009).「言語表現から見る日本人の『内』と『外』意識」
7. 佐藤啓生(2011).「現代日本語の謝罪言葉に関する研究」『岩手大学大学院人  
文社会科学部研究科紀要』第20号
8. 鈴木孝夫(1973).『言葉と文化』岩波書店
9. 高崎文雄(1998).「日米言語生活の比較-ほめ言葉の文化的背景をめぐって」『学  
苑』 昭和女子大学近代文化研究所
10. 張賽劍(2006).「日本人の集団意識について」『三江学院卒業論文集』

11. 中山緑朗等 (2009). 『みんなの日本語事典』 明治書院
12. 文化庁 (2007). 「敬語の指針」 文化審議会答申
13. 寺村秀夫 (1982). 『日本語のシンタクスと意味』 I くろしお出版
14. 柳田国男 (1958). 「日本における内と外意識の概念」 『講座—現代論理』 築摩書房

# 担当者からのコメント

— 日 研 生 論 文 集 に 寄 せ て —

宮本 律子

## 日研生論文集に寄せて

宮本 律子

任アランさんと張子洋さんは、私の「留学生のための課題研究 I B・II B」で論文の準備をしてきました。

アランさんは、日本語と韓国語の受身表現を調べたいということで比較的早くテーマが決まり、こつこつと文献を調べて仕上げました。丁寧な仕上がりだと思います。

張さんは「すみません」という日本語の謝罪表現が様々な意味で用いられることに興味を持ち、どのような場面や相手にこの表現を使うのかをアンケート調査で調べました。分析していくうちに日本文化の「ウチ」と「ソト」の区別がこの表現の使用法に深く関係があることがわかり、さらにこの区別がよく表れている日本家屋の様式についても調べることになりました。言語表現と建築様式という二つの異なる要素を取り上げたので、それぞれの分析が浅くなってしまったのが少し残念です。

二人とも1年間よく頑張ったと思います。昨年度の課題研究では馬さん、焦さんが参加し（すでに帰国してしまいましたが）、今学期は、易さん、鄭さん、熊さん、張さん、そしてアユさんたちも他の人のテーマにもよく関心を持ち、励ましあったおかげで仕上がったと思います。

これからも留学中に興味を持った日本語や日本文化についての本を読んだり、友だちになった人たちと連絡をとりあったりしてください。

\*\*\*\*\*

2012-2013 日本語・日本文化研修留学生 論文集

発行日 2013年7月31日  
発行 秋田大学国際交流センター  
010-8502 秋田県秋田市手形学園町1-1  
著者 イネス・マルケス, カルロス・ロドリゲス,  
任 芽蘭, 張 子洋, 牲川波都季, 宮本律子  
編集責任者 牲川 波都季  
+81-(0)18-889-2865  
segawa.class@gmail.com

\*\*\*\*\*

